
或る政略結婚の実体

伊達 ししい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る政略結婚の実体

【Nコード】

N0441U

【作者名】

伊達 しい

【あらすじ】

初投稿です。宜しく願います。

顔もあわせたことのない王子と王女の結婚で生まれるどたばた系ラブコメディ。二人がお互いをどう認めるかのせめぎ合いを書いています。ければと思っております。

prologue : 1 side : 姫 (前書き)

このお話は最初SNDM (寸止め) 48という仮のタイトルをつけておりましたが。

あまりにもなタイトルなので変えてみました。

内容は仮タイトルまんまのコメディもどきです。

少しでも楽しいと思っていただければ幸いです。

prologue : 1 side : 姫

はじめまして伊達^{だて}ししいと申します。初投稿作品になりますがよろしく願います。

一応R15にさせていただきます。

王家に生まれたからには果たさねばいけない義務があることはわかっていた。

同じ年の乳母のリリナの娘アンナとはともに育ったが、私はいつもイイものを食べイイものを着せられている。

つまりそれが身分の差であり、その差は唯この身が王家に生まれついたという理由でしか生まれてこないことも。

私は4歳くらいのころに気がついてしまったのだ。

それでもまだ私は気楽である、大兄さまは長子として生まれついてきたがゆえにこの国を背負って立たなければならぬ。

中兄さまは大兄さまの政務のサポートをこなし、何かあった時のスペアとして大兄さまにお世継ぎが生まれるんで毒にも薬にもならない様に目立たず存在している。

小兄さまは軍事に適性を見出されたようので日夜鍛練に励まれておられ、軍のTOPとして立てるように、努力されておられるけれど、スペアは2つもいらないので、もうすぐ臣下に下らなくてはならない。

実の兄を兄とも呼べなくなり、そのうえ兄に膝をつかなくてはならないのだ。

お姉さまはこの間、東の隣国へ嫁いで行かれた。

その後2〜3カ月に一度便りは送られてくるが、姉さまのいつもの快活な文章ではないところを見ると、妹姫に出す手紙でさえも自由にならない生活なのだろう。

お手紙通りお元気でいらっしやることを願うしかない。

私はそんな王家の5番目に姫として生まれついたのだ、今まできれいなドレスを着て贅沢な暮らしをおくり、何不自由なく暮らせたのも何かの時に役に立つから、以外の理由は思いつかない。

そして私の何かの時は13歳のときにやってきた。

お庭で王妃であるお母様とお茶をしているときだった。

お父様が来て、こういったのだ。

「姫や、お前の興し入れ先が決まったよ」

私は一瞬目を見開いたがまるで天気の話でもしているかのようにつづき返した。

「まあ嬉しい、陛下。それで私の旦那様はどちらの国の方ですか？」

その日から2年。15になった私は不安を抱えながら嫁ぐ国に向かう馬車に揺られている。

「どんな方なのかしら？」

私は晴れた空に向かってそうつぶやいた。

この馬車に同乗するのは我が国の侍女であるアンナとかの国のお迎えである、大臣のクラクス様。

車輪の音にかき消えるように囁くようにしてつぶやいたのだから、この質問に対する答えなど望んでいなかった。

私を知っていることと言えば、3つだけ。

隣の軍事大国ダンジールの世継ぎ王子、フィジョン様と言うお名前。御年が私より5歳年上の20歳になられるということ。

そして、私が2番目の正妃であるということ。

前に王妃様でいらした方は、出産で命を亡くされたあげく、お生まれになった方も姫様であまり体がお丈夫でないとか。

まあ、そうでもなければ、なんの利用価値もない隣の小国の末姫なんかもらいませんよね。

別に隣国まで鳴り響く美姫ってわけでもないですし。

私の役割その一は、その姫様のお相手と養育。

その二は言わずと知れた、お世継ぎ作りだけどねー。

うちの父様は愛妾を持たず、母様だけでも子供が5人。

子供が出来やすい家系だと思われて、そこが望まれた最大の理由ということらしい。

ま、いいけどねー。

フィジョンさまにはただいま絶賛お付き合い中の愛妾様がいらつしやるので、

理由その二になってます。

理由その三は、まあ政治的なこと。

私の国は小さいけれど海に面しております。

タンジールから流れ込む大河、トイサ河河口の港を所有しております。

その上国土はそれなりに温かく、作物も割ととれまして、輸出もいたしております。

また海のないタンジールへの最大の輸出品は塩。

タンジールがウチに攻め込まないのはその国境が高い山脈がそびえ立っており、唯一ひらけたところは川沿いの湿地帯で馬での行軍もままならないから、ですし。

それだけの労力をかけて支配するだけの理由もないということ、同盟国扱いなのだ。

タンジールからの保護並びに同盟関係の強化のあかしとして興し入れ、ということになってます。

ま、花嫁行列のあとに塩を担いだ馬が続いていることで想像してください。

まあそんな感じで、タンジール側から「しお姫」なんて言われてることも知っておりますよ。

まあ、王族同士の結婚なんてこんなものです。

できればフィジョンさまがあまりブサイクでなく、変質的な性的趣味のないかたでありますように。

そう晴れた空に願いをかけてみる。

昨日国境を越えて、王都まであと3日。快適である馬車でもやっぱりちよつと腰が痛い。

侍女やお付きの騎士たちはもつと痛いんだろうなあ。

ごめんね、付き合わせて。

今日の宿場には温泉があるらしいよ。

ゆっくりしてね。一回熱でも出そうかな。

そうすればもう一泊位休めるよね。

熱くらい自由に出せなくて、王族なんて務まりませんのよ。

ここで臣下を休ませる理由を作るのも姫としての務めですわよね？

だってわざわざ行程に温泉保養地が入っているのは、そついでこと、
ですわよね？

お相手の王子様は次に出てまいります。
楽しんでいただけるようがんばります。

prologue side・王子(前書き)

まだ出会う前の二人の認識です。

二人の立ち位置なんかもこれでわかるかな？
と思っています。

prologue side・王子

「王子。国境のロレミアニアからアーシエラーナ姫が国境を越えた、との報告が入っております」

侍従のその言葉に、一瞬手が止まったが、うむ、とうなずくとすぐに執務を再会した。

姫ねえ。

目の前の書類の整理に没頭しながらその存在が心の片隅にひっかかっていた。

二年前に出産とともに死んでしまった正妃。

それ以来決まった妃ももたず、戯れに女を呼びつける。

そんな生活に慣れてしまったせいか、どうも気に入らない。

だからといって国境を越えた、という姫には何の気持ちも浮かんでこない。

この国は大国と持ち上げられてはいるが、軍事力を基礎とするこの国においては、弱みをみせることが政権転覆のきっかけにもなりかねない。

先の妃は有力な貴族の娘であったからもらったようなもので、なんの気持ちもなかった。

適当に相手をしていたのだが、すぐに飽きた。

足が遠のいてから懐妊の知らせを受け取った時は何かの間違いだと思った。

その間違いは、すぐに明らかになった。

妃の侍女の一人が実は女装して入り込んだ男で、その男とよろしくやっけてきた子、という話を少々脅しつけたら白状した。

そのとき、父親である騎士公爵と話をつけ、女子立った場合は姫と

して育てる、男子として生まれた場合は公式には死産として赤子は臣下に下げ渡す。とした。

そして今後一切妃の部屋には渡らないとも申し伝えた。全く、どんな育て方をしたのやら。

妃は出産で死に、生まれたのは娘でとても可愛い。

自分の娘ではないとは知っていても腕に抱いた瞬間に

『これは俺の娘だ』と無条件に思ってしまったのだから不思議だと自分でも思う。

ありがたいことに死んだ妃に似た感じに育ってきている。

浮気相手の侍女もどきの男は幽閉の上いつの間にか死んでいた。

それですこし肩の荷が降りたとおもったら、今度は王が倒れた。辛い重い病気ではなかったが、信頼篤い騎士公爵の娘の浮気がシヨックで病気の引き金になったのかも知れない。

政務はもっぱら王子である自分が行うことになった。ありがたいことに自分は一人っ子であり、有力な後継者になりそうな血縁もおらず、無事に政務軍事の事実上の権力はこちらに委譲された状態である。

父王の具合がよくないととなると、次期王妃の座が空白となる。元々社交が好きでない母は父の看病を名目に社交には顔を出さなくなった。そのため、王妃の座をねらう有名無名の貴族たちがこぞって娘を紹介しに訪れるようになった。そして火花の散らし合いのあげく、膠着状態に陥ったのだった。

誰を選んでもバランスが崩れる。こちらとて、血気盛んな若者であるから、それなりの欲望は持ち合わせており、手つとり早く処理する相手は欲しい。そんなときに手をつけたのが今の女。国一番の歌姫だった。

その女も結局権力に目がくらんで、最近なにかとつるさくなくなってい

った。

もう女はこりこりだ、と思わせるほど一触即発の緊張状態であった。そんなとき海の国とこちらでは称されるアルシエス王国の姫からの縁談が持ち込まれたのだった。

たぶん中立派のだからアルシエスに妥協案としての輿入れを要請したのかもしれない。

お相手の姫は末の姫でその当時十三歳。まだいささか幼いので、二年ほど国元で育てた後、そちらへの輿し入れでいかが。と締めくくられてきた。

こちらの膠着状態を見透かしたかのよう渡りに船の他国の姫君の輿入れの申し入れである。

相手は小国とはいえ、水運ならびに貿易の相手国であり、食物の輸入先でもある。特に塩はほぼすべてをアルシエスに頼っているようなものである。決して粗略に扱われるべきでない国の姫だ。

またアルシエスは貿易で成り立っている国だけに政情不安には敏感である。戦が起これば荷物も滞る。隣の大国の内戦など死活問題になりかねない。荷物の遅延や損傷・盗難など国家レベルで貿易に力を入れているあの国では我が国の混乱は避けた買ったのだろう。隣国が女で政情不安定になるくらいならば、いつそ娘を嫁がせるか、と言う話になったのかもしれない。

そんな姫をもし宮中での権力争いなどに巻き込みでもしたら、すぐに塩の輸入はなくなってしまうかもしれない。

つまり、これは利害の一致による政略結婚以外の何者でもないのである。

大事にしつつ、子を成せ、というのがこの結婚の大命題ということだろう。

「十五の小娘か。」
二年も婚約期間があつたにも関わらず、お互い肖像画の交換も成されなかつたので顔も知らない。
知っているのは十五という年齢と、名前がアーシエラーナというこ
とだけである。

「ま、くればわかることだ。」
考えても始まらないことは考えない。

今は空っぽで妙に居心地のよい後宮を思う。
十日ほど前までは女優が居座っていてなにかと騒がしく、そのあと
は家具の入れ替えだ、荷物の整理だと何かと騒がしかったが、今は
不思議と静かによく眠れる。
この安眠もその姫が来るまでのささやかな休息なんだろう。

できれば、あんまりバカじゃなくてそこそこの容姿であればいいな。
まだ見ぬアーシエラーナ姫への思いはそんなものであつた。

1 - 1 (前書き)

本編スタートです。出会い編とでも申しませうか。

温泉で仮病を発症して微熱をひねくり出した私は、当初の予定よりも3日長くその温泉地に逗留した。

元々天気も上々予定より早く進んでいると聞いていたし、時間調整もかねていたのかな。

そのおかげか、付いてきた護衛も侍従も侍女たちも心なしか血色がいい。

馬も元気を取り戻し、心なしか馬車も綺麗だ。

それはそれで居心地いいし。

結果オーライでよかったのかな？

私もすっかり疲れがとれたし。

もし王子様が私のこと好きになれないと思うなら病気療養を理由にあの温泉地に別荘建ててもらおう。

そこで”ビバ！温泉引きこもりライフ！”を送ろう。

お気に入りの美人女優をはべらしてらっしゃるといふ噂だし、あつという間に私なんか飽きるんだらうなあ。

そしたら、”ビバ！温泉引きこもりライフ！”に突入できるからいいかも。

そんな想像をすることができるといふほど、気力も回復してきた。明日には王都につくらしいし、どんな人なのかな。王子様。

馬車の窓から見えるこのタンジールの景色はウチとは違う。

ウチん所は窓から見えるのはほぼ農地である。

海沿いにある王城の近くは塩田がきらめいていたし、内陸に向かえば野菜や麦の畑がまるでじゅうたんのように広がってる。

トイサ河から引かれた運河からの灌漑用水がきらめいて、本当に綺麗な国だと思つて通り抜けてきた。

私の行列に気がつくのと、手を振って見送ってくれるような人懐っこい我が民。

その中を馬車は進んできた。

山脈を馬車で越えられないのはわかっていたので、途中からトイサ河を船で遡上。

一番近いタンジールの港は板でできた小さな棧橋があるだけの簡素なものだった。

タンジールは質実剛健、軍事の国である。

棧橋も頑丈に作って有事の際は敵の利便になることを恐れていつでも壊せるように簡素にできている。

と私を迎えに来たクラクス 大臣が説明してくれた。

そして船から降りた私を迎えてくれたのは、見渡す限り広がる牧草地と馬だった。

その一面に広がった光景に思わず「すごい」とつぶやいてしまった。余りにも違う。

それが第一印象だった。

感動的な牧草地帯も何日も同じような光景が広がっていればさすがに飽きる。

河沿いなど気候の温暖な地域にはそれなりに農地もあるらしいが、この国では農耕より放牧に地質もあっているらしい。

ウチより寒いらしいけど、イモも無理なのかなあ？

もし王子様が農産に興味あるならその辺も提案してみよう。

行き先に目をやると高い塔が見えてきた。

あれがタンジール王都ノクロア、別名鋼鉄の都なんだ。
そこには未来の旦那様がいらっしやるのね。
馬の足取りが心なしに軽くなってきた。
馬車が石作りのアーチをくぐっていく。
旗がなびく大通りを私を乗せた馬車が通り過ぎていく。
町の人々は、私が誰でなんのためにここまで来たか知ってもなおこ
ちらを見ない。

車窓から顔を出して手を振ろうとしたら、クラクス 大臣に止めら
れた。

「王子と対面するまで、臣下に顔を見せてはなりません。そういう
しきたりです。」

そう言つて、隣に控えていた侍女のアンナにベールを出させた。

「申し訳ありません、失念しておりました」
そういうとアンナに手伝ってもらいながらベールを身に付けた。

ベールを神経質に直しながら座っていると、馬車の速度が落ちて、
止まった。

「姫様。到着したようです」

「わかつたわ、アンナ。行くわよ」

クラクス 大臣に手をひかれ、私は幾重にも重なったベールの下で
不安と闘っていた。

ひととき大きな扉の前で一度止まった。
タンジールの言葉で私の名が呼ばれた後、音もなく大きな扉が開く。
そしてベールでばやけた視線の先に私の未来の夫、フィジョン様が
座っていた。

「姫、遠路はるばる我が国までようこそ。これほどまでに可愛らしく美しい姫を我が妃に迎えることができてうれしく思う」
そういうと壇上から降りてきてクラクス 大臣から私の手を受け取り、壇上へいざなってくれた。
私はその前で膝をおる。

「王子、麗しい御尊顔こうしてお目もじできてうれしく存じます、幾久しくよろしくお願いいたします」
見えもしない癖にこう挨拶する。

「お二人にツドリル神の御加護があらんことを」
クラクス 大臣がそう祝いの言葉を述べれば、この謁見は終わる。
そう段取りを聞かされていた。

「姫、お疲れだろう、部屋に下がって疲れをいやされるとよい。
後ほどかがって旅の様子など伺いたく思うがいかがか？」
そう王子から声がかかった。

「湯の後でよろしければ」
私は率直に答えていた。

広間はざわめきに包まれた。

私は何か失敗したらしい。

1 - 1 (後書き)

まだお互いの顔もみてません。

SNDM(寸止め)の本領発揮です！

1 - 2 (前書き)

まだお互いの顔もみてません。

どうしてこんなに皆様、動揺なさっているのかしら？

私は少し戸惑いながらも下げた頭を上げずにいた。

だって、まだ上げてよいつて言われてないしね。

足は大丈夫だけど、ベールをのせた頭が重い。

血が逆流しそう。

「姫も冗談がお上手だ」

そういつて私を助けてくれたのは婚約相手の王子ではなく一緒に来たクラクスー大臣だった。

「旅の汚れを落としてからお会いしたい、という意味でございますよね」

豪快に笑いながら成された言葉に、私の先ほどの不用意な発言がこちらでは問題発言であることに気がつかされた。

それをクラクスーはフォローしてくれたのだ。

「ええ、そのつもりで申し上げたのですが、何か冗談にでも聞こえましたでしょうか？まだこちらの言葉がうまく話せませんし、何か間違えてしまいましたか？」

私は無邪気に見えるように姿勢を戻すとおずおずと発言した。

私はまだ十五歳なのだ、そのような隠語などなにも知りません、と言うかのように首を傾げてみた。

「姫の言葉はとてもお上手ですよ。ただ変に深読みした大人たちがいた、と言うことです」

そついうと、王子も私の擁護に回る。

「よかった。失敗して受け入れられないようなら塩とともにまた国に帰ってきなさいと、父に言われて参りましたから、また来た道を逆戻りかとおもいましたわ。」

こちらの国だって私を迎えねばならぬ問題があるのだ、このような

子供の言葉一つを揚げ足をとるようなことをしていれば、まだ馬の背から下ろされていけない塩を持ち帰られてしまうかもしれない、と思わせることができればいいのだ。所詮私はしお姫なのだから。

「姫、これから幾久しくよろしく頼む」

「ええ、王子様こちらこそふつつかではありますがよろしくお導きください」

この言葉が交わされた時点で婚約が成り立つ。

「婚約の証として、我が腕輪を贈ろう」

そういつて手に飾られた真新しい腕輪がはずされて私の左手にはめられた。

いままで王子の腕にぴったりに見えたその腕輪は私の腕に巻き付いたとたんそのサイズを変えて、私にぴったりになった。

少し驚いて王子を見上げると、

「するべきものに併せて変化するのだ」と小声で説明してくださった。

「私からは、」といつて胸元にぶら下げたチェーンを引き上げた。

「こちらの指輪を。お手を拝借してかまいませんか？」

そういつて王子の手を取ると、こちらの王家の紋章を彫り込ませた一見黒にも見えるほど深い紺の石をはめたものを人差し指にはめた。

「なんとすばらしい。ゼオールの指輪だ。ありがたく頂戴しよう」
そういつて臣下に見せつけるように指を掲げて見せた。

事前に聞いていたので右手にぴったりとその指輪はおさまった。

ああ、よかった。これがきつくて入らない！

とかだと困っちゃうのよね。

指輪サイズは私の親指でもぶかぶかだったんだよなあ。

手をみた感じだと、しっかりと剣の稽古もしてる堅い手だった。甘やかされたほんぼん王子じゃなくてよかった。

そんなことを思いながら、王家同志の結婚でよくみられる、『ウチってすごいんだぜ?』的な贈り物の交換をすませる、ってこと自体が表面上の婚約の儀だし。それが終わるとようやく私は退出を許されて休むことができる部屋に案内された。

やれやれ。

結局ベールが厚すぎてあんまり王子様の顔わかんなかったわー。髪の毛が金色なのはわかったけど。

謁見の間で言ったようにゆっくりお湯に浸かって寝たい。てか寝かせろ。

着替えをすませた後、晚餐なんてどれだけこき使うのよ。

まあ、晚餐の席では顔も見られるだろうし。向こうが私にがっかりしなければいいけど。

可愛らしいとか清楚とかは皆言ってくれるけど、だれも綺麗なんて言ってくれないまさに平凡な私だからなあ。

あんまり美形な王子様だと困るなあ。並んだときのバランスが悪くなるし。

そっいえば結構背高かったな。

ヒール高くしないとだめかな?

足すっごく疲れるんだけど。

これも王女のつとめ、じゃなかった妃のつとめですもの、足の疲れなど外には悟らせずにかんばって見せましよう。

私はそんなことを考えながらコルセットを締められていた。
あー苦しい。

疲れてるんだからお願い。

もう少し手加減して、アンナ。

1 - 2 (後書き)

パーツだけの王子様。
これもSNDMかと。

1 - 3 (前書き)

ようやくお互いの顔をあわせることに。
王子様の外見やいかに！

いよいよ王子様の麗しい御尊顔と御対面だわね。

先ほどの初対面では失敗してしまったみたいだし、今度はおとなしくお姫様をしなくちゃね。

あまり「裏のある会話なんか出来ません」。なんて振りしているとバカのレッテルが貼られちゃう。

それは国元のお父様お母様お兄様に申し訳が立ちませんもの。ワタクシはこう見えても、王女なんですから。

その辺のウィットの効いた会話も出来なくては、恥ですわ。

「姫様。いただいた腕環に合わせて、今日は淡い黄色のドレスにいたしましょう。」

アンナがそう言って荷ほどきしたばかりのドレス達から、春の霞のような黄色のドレスを出してきた。

「そうね、きつとお気に入りの女優様は悩殺ドレスでしょうから、私は清楚や初々しさを前面に押し出していくしかないですし。」

どうせ色気皆無のお子様ですし。」
そう言って年よりもさらに幼く見えるようなふわふわドレスに手を通した。

まだ正式に婚儀前なので、使用人も侍女も国元から連れて来た者たちが世話をしてくれている。

婚約期間のうちにこちらの国のしかるべき身分の方に侍女となっていただけのだろう。

それまでは気楽な会話もそこそ楽しめる。

ま、壁の裏には様子をつかがっているモノの気配もしますけど。それはまあ、お約束つてもんで気にもしません。

だって王子様に愛人サマがいらっしやるのは周知の事実ですし。それを承知で私もこの国にきましたし。

まだ私は15の小娘ですし。

発育もこの国の方に比べればわっ・っわるいっ・っし。
どうせ胸小さいしっ・っ・っ。

まだ15だもん。母様位は大きくなるっ・はっ・ずっ・だもん！
くそー。王子様の女の好みが巨乳なのは知ってるけど、まだ育たないものは仕方ないじゃないか。

いただいた腕環は、銀色。そこにはめ込まれたのは金色のステライト。

金のステライトは身につけている者の魔力に反応して輝く石だからね。

こっちのチカラを見極めたいって思惑もあるんだろうね。
ほどほどに光るようにこちらの魔力も調節しておいて。

さて、愛しの未来の旦那様と楽しくご飯を食べにいくとしますか。
少しは休みたいけれど、謁見から晚餐までの身支度に与えられた時間は休憩時間はとれないほどみじかいのよね。

やっぱり、大国とはいえ、武で鳴らした国はそういうところに時間を取らないのかしら。

そういう細かい作法も早く身につけなくちゃね。

やれやれ、国を背負って嫁に来るこの身は、上げ足とられ、批判の眼にさらされるの覚悟で臨まなくちゃあっという間に宮廷の暗部に取り込まれてしまうもの。

そんなことも教えずに他国に嫁にやる国があるもんなら見てみたいわ。

それでも、さらりとこちらの方が文化レベルは上なのよ。という余裕も厭味にならない程度漂わせる。

なんて綱渡りもしていますが。

晩餐会の行われる大広間までゆっくりとせずと進む。

今私の手を引いてくださっているのは、クラクスー大臣。

すっかり私の保護者みたいになってしまつて、なんだか申し訳ない。

本来ならウチの国の政治家も同行してなくてはならないんですが。

同行したのはこちらの宮廷に上がる資格のない、騎士隊長だから。

大広間まで私をエスコートできないんだよねえ。

ウチの大臣に手をひかれるより、こちらの有力者に手をひかれたほうが、

小国の姫ときつい目を向けてくるお嬢様方への牽制にもなりますしね。

しずしずと進む長い廊下には、ガラス窓と鏡が張られている。

すっかり日の暮れた廊下にこれでもか！と並んでいるろうそくの光を最大限に明るく見せる効果を狙つてのものだ。

夜だとしても薄暗い晩餐会なんてありえませんもの。王宮で。

その分火事が怖いが、その始末もまた王宮のプライドつてものです。

ろうそくの炎に黄色のドレスにつけられた宝石がきらきらと輝く。

こちらではあまり紡績が発達してないので、フワフワのシフォンは珍しいのだ。

このシフォン生地も実は他国には言えないルートで出来上がったいわくつきの生地だし。

技術と文化を見せつける一品となっております。

私のドレスはそのシフォンをこれでもかー！と重ねてる。
そのシフォンに宝石を縫い付けているのでふわふわのきらきら。
ちょっと、いい気分になるドレスに仕上がっている。

私が通り過ぎる廊下の端にはドレスに見とれるこちらの御令嬢たちがいるし。

顔は残念な平凡だけど、ドレスは気合入ってますよ！

まだ誰にも紹介されていないので、眼の端に入る御令嬢たちは私にとっていないも同然。

王子様に紹介された時に初めて意味を持つ存在になる。

私の今の扱いは、賓客であり、王子の婚約者（非公式）ですから。
向こうも意地悪することはできない。

この扱いが終わるのはこの晩餐会。
王子が私の手を取って紹介して周り終わったあとになる。
その短い間に私は、私の立ち位置を見極めなくてはならないのだ。

色っぽいねーちゃんたちの隠れ蓑として過ごさなくてはならないのか。

きちんと未来の王妃として扱われることができるのか。

アンナが言うには、今後宮には私しかいないそうだけれど、婚儀前にさすがに女を引っ張りこむのはと遠慮していることも考えられるしね。少し様子を見なくては。

私はクラクス 大臣に手を引かれて広間の前まで来た。

ここで初めて王子様に引き渡される。
すっと隣に立った王子様。ちらりと横目でみるとヒールを履いた私

の眼が王子様の首。

うん。いいバランスじゃない？ このヒールにしてよかった。

そしてゆっくりと視線をあげる。

どうか平均程度でありますように。

隣に並ぶのがつらいような美形でも、もう一度見るのも嫌なほどのブサイクでもありませんように。

少し日に焼けた顔。

椿の葉のような暗めの緑の眼。

そして先ほどもきがついた、きらきらの金の髪。

こうやって色の配置はいいのに。

残念なことにおめめが。

捨てられた子犬チツクに垂れ目さん……。

せめて切れ長だったら超イケメンだったのになあ。

釣り目さんだとこわくて近寄れない感じになっちゃうよなあ。

それ考えると、このくらいの垂れ目が愛嬌あつて可愛いかも。

これだけ鍛えられたムキムキマッチョじゃなかったらな！

武を尊ぶ国柄でなよなよ優男王子は無理だとしてもせめて細マッチ

ョくらいで止めておけば、バランスもよかったのに。

……っち。ちょっと残念なイケメンか。モテモテのはずだわ。

こんなちんちくりんを嫁にもらう羽目になってごめんね。

やっぱ、ポーン・キュッツ・バイーンの女優さんのほうがこの王子様には似合うわ。

って言いたくなった。

これが私の旦那様か。

私の視線に気がついたのか、王子と視線が合う。

私はふんわりと微笑んで見せた。

これからよろしくね。と言わんばかりに。

妻にはなれそうにもないけど、共犯位にはなれるし、友達になれたらしいとおもってる。

そんな気持ちを入れて。

1 - 3 (後書き)

王子様の外見です。姫様的には75点とか思っています。
まだ口に出してませんが。

姫様を見た王子様の評価はそのうちに。

ようやく「指先での手つなぎ」までこぎつけました。

でも手袋ごしだし、義務と儀礼ですから。

・・・ノーカン・・・ですよね？

1 - 4 (前書き)

マジマジ顔をみていたら
王子様がびっくり発言を。
SNDMどころか急展開？

さて、いよいよ御対面とあいなりまして。

引き続きのお披露目の晩餐会の前です。

王子様・クラクスー大臣・私は控えの間でお互いの顔をマジマジと見る機会をえました。

まあ初対面ってことですね。

王子様も露骨な嫌悪をこちらに示してきませんし、及第点はいただけたのではないでしょうか？

たぶん、ですけど。

私からみましても。王子様は優しそうだし、それなりに教養ありそうだし、顔も背けたくなるほどブサイクじゃないし、触ると脂がしみだしてきそうなおデブでもないし。で良かったと思うほどほっとしているわけですが。

王子様的にはどうなんでしょうか？

やっぱり妖艶な女優さんとか見なれてると、私なんかお子ちゃまですよねー。

わかってますよ。でも、まだ15ですから！

頑張れば好みに育つかもよ！

あ、でもウチの両親考えるとちょっと、いやだー！頑張らないとだめかなー、とは思っけどね。

なんか、どうして黙っているのよ。

心にもないお世辞のーつや二つかまさないと、外交的にもやばいんじゃないありません？王子様。

まだ晩餐までは時間がありそうです。

できれば一度座って休みたいのですが、王子様。

いつまで人の手握って立っているつもりですか？
私、そんなに体力自慢にみえますか？

そんな気持ちを込めて王子様の眼を見つめてみた。

人の顔みて、動かない王子様。

「あの。出来ればお時間まで少し休みたいのですが」
動かないならばしかたない、私が小声でそう告げる。
ここは少し体力ないアツピールとかないと。

この国では女子も適性があれば騎士団に入れるほど、女性の体力がある国らしいし。

そんな体力は私ないし。

そういう気遣いができないのかなー。と思った。

「・・・ああ、気がつかなくて申し訳ない」

そう言って私の手を引いて二人掛けの椅子に連れて行ってくれる。

ああ、よかったやつと座れる。

ふわふわのスカートを二人掛けの椅子一杯に広げて座ろうとした時に、すつとメイドが寄ってきてお茶や軽いお酒などを視線で勧める。

「お茶を願いますか」

わたしは会話が進まない時のためにお茶をお願いした。

向かいの一人掛けに王子様がおかけになるものと思っていたのに、王子様がスカートかきわけて隣に座ろうとする。

あれ？

何考えてるの。公式ドレスの時は向かいに座ってもらわないと。

それに気がつけばまだ手、預けたままじゃん。

スカートを整え王子様の座る場所を確保しなくちゃ。

手を取り戻して私はドレスを抑える。まったく。手間かかるわね。

下手に上に座られたら、しわになっちゃっわ。

ドレスを整えようとすると、アンナがすっと寄ってきてドレスを押しさえてくれた。
目でお礼をいう。

隣に座った王子様は盛装である軍服にたくさんのモールと勲章をつけていた。

そしてふわふわのドレスの一番上、クモの巣みたいに薄いシフォンをつまんでいた。

ああ、なるほど、ドレスの生地が不思議だったってわけですね。

そりゃ、これウチの最新技術のたまものですよ。まだ門外不出ですしね。

珍しくもあるでしょうねえ。

「姫。一段とお美しい」

(ドレスが)という言葉が透けて見える台詞。

まあ社交辞令の決まり文句ですわね。でもここはちよつと頬を染めて、お礼を申し上げないと。

「・・・まあ、ありがとうございます。王子も素敵です」

・・・よし、うまく行ったわね。

しっかし、この王子声も低くて20に見えないくらい大人びてるな。5歳差で今年20歳ってことは中兄さまより2個年下なんだよねえ。中兄さまよりずっとフケ・・・いや大人びて見える。

声が低いから背中にゾクつくくるわ。

私幼くみえるらしいから、下手すれば夫婦どころか年の離れた兄弟ポジかなあ。

王子様は先の王子妃さまを、出産時に失くされてるから、その不幸がフケて・・・いやいや年上に見せてるのかもしれない。

私と並ぶとやばいよなあ5歳どころじゃない差に見えるような。もう少し大人っぽいドレスにすればよかったかなあ。

でも新作のシフォン生地を発表の場でもあるし、ふわふわドレス以外の選択肢なかったし。

まあ、ここは開き直るか。

まだ、私15だしー。

中兄さまを基準に衣装考えてきちゃったしなー。

まさかこんなに老け・ゲフン・大人っぽい方だとは思わなかったわ。

「姫、遠路よくいらしてくださいました。

仲良くやって行きたいと思うのでよろしく頼む。」

隣でワインのグラスを傾けながらそう王子がいった。

「はい、お心になうよう努力します」

お茶のカップを持ち上げながらそういった。

「姫、貴方に伝えなくてはならないことがあるのだが」

そこで言いにくそうに言葉を切る。

な、なんかあるのかしら。やっぱり子供過ぎて無理だから帰れ、とか？

私はすこしびくびくしながら少し身体の向きを変えて王子様のほうを向いた。

その視線を受け止めて王子様がゆっくりと話します。

「姫も御存じのことかと思うが、国王陛下の身体の具合があまりよろしくない。

今日の晩餐会にも出席されない」

まあ、お倒れになった言うことは正式に発表されているので聞いて

いる。

正式な晩餐にも出てこれないほどお悪いとは聞いていなかった。

「お大事に、結婚式の前にお見舞いにおうかがいしたいのですが」「私はそうするようにとお父様お母様にも言われてきてるし、お見舞いは娘になる身としては当たり前だろう。」

「いやそれには及ばない。離宮で静養なさっているし。」

結婚式には出席されると言ってきているのでその時にお逢いできるだろう。」

そこで王子の話は切れた。

ふむ、見舞いは不要と伝えたかったのか。

「父は、いや国王陛下は、私たちの結婚式を機に退位して私に位を譲りたいと言ってきてる」

そこで一旦話が切れた。何返事すればいいのよ。

「……はあ、国王となられるってことですよね。おめでとごうございます。」

気の抜けた返事が口から洩れる。

「貴方との結婚式と同時に戴冠式になるので、そのつもりでいてほしい」

戴冠式はまだ見たことないなあ。カッコいいだろうなあ。近くで見られるのは幸せかも。

と思ったところで気がついた。

「あれ?……ということは、私はどうなるのでしょうか」

まさか、まさかですが。女優サマを王妃ポジにつけるので、脇で見ているとか?

「結婚式のあと続いて戴冠式をする。ということ……あなたは王妃となってほしい。」

うわー。どうしよう。そんな立派なドレスもってきたっけ？

すごい話を聞かされた時、一番最初の私の頭に浮かんだのはそんな疑問だった。

ウエディングはもってきたけどウエディングのまままで戴冠式ですか？
それはちよつとやだなあ。

あ、それともコチラ伝統の王妃用ドレスとかあるのかな？

もう少し早くそういうことは言ってよ！王子様！！

女の支度には時間がかかるんです！

私のドレスを直していたアンナが硬直している。

つてことは外交ルートでもそんな打診は一切なかったってことかよ。
無謀にもほどがあるよ。

持ちあげたままのカップに口をつけていないくらいなみなみと入ったお茶をこぼさなかったのは奇跡だったと思う。

だって、結婚式は10日後なんだよ。

どうしろと？

1 - 4 (後書き)

昔のドレスは手織物。

10日で戴冠式にふさわしいドレスを作り上げるのは無理だろう。
王子様は軍服のままだからいいけどナ。

王子、オンナゴコロとか国威とか少し考えてあげてね。
武を重んじると言ってもちよつと連絡不足だと思えます。

さて、姫はどうする？

実家との距離は飛ばしても陸路3日+川の水路2日ほどかかります。

番外編 説明臭い何か『典礼について』(前書き)

説明をしなくてはならなくなりました。

説明要員をだしました。

すいません・・やらかしたかもしれません。

番外編 説明臭い何か『典礼について』

どうも始めまして。

私めはこういうものでございます。

そういつて分度器で測ったかのような15度の礼をされた。

すつと作者あたしの前に差し出されたものは

作者には見慣れたはずの名刺、というもの。

この世界に在ると設定したっけ？と思いつつその名刺を受け取る。

さて、伊達様。

このたびはわが世界を物語にさせていただいてありがとうございます。

作者あたしは、「いえ・・・」と言おうとして制された。

このたびはわが国の魔法使いの計らいにより、説明の任を仰せつかって参りました。

しかし会話はできなくなっております。

私めの一方的なご説明をお聞きいただければと思っております。

会話になってしまいますと、双方の世界によくないと聞き及んでおりますので、

そのあたりはご了承くださいませ。

そう言つて私の前の音楽室のモーツァルトのような格好をした人は一礼した。

頂いた名刺には、透かしが入っており、その上金箔の王冠マーク。

下にはなぜかカタカナで『レナード・スパラックス』と印字されていて。

その上に書かれた肩書きは、『アルシエス王国典礼官』と書かれていた。

つまりこのモーツアルトもどきさんは今書いていてちょっと行き詰ってしまった物語の中の人、ということらしい。うわー。あたしイタイわー。

でもどうしようかと思っている、重大な問題で行き詰っていることも確かだし。

その解決の糸口になるなら話だけでも聞いてみるか。

熱帯夜確定の気温30度からさがる気配のない午後9時。

節電のため昨夜充電しておいたノートパソコンを開いて続きを書こうとしていたあたし。

そのPCをさっさとシャットダウンしてレナードさんに向き合った。

では、ご説明申し上げてもよろしいか、伊達殿。

あたしは同意の印に、深くうなずいた。

手にはミスコピー《チラシのウラ》とボールペン。がつつり聞く気満々です。

ただいま、伊達殿は大陸で神国を含め3番目に長い歴史あるわが国の典礼のしきたりと、末姫様が今度嫁がれるご予定の大陸の新興勢力であり、武を重んじるタンジール国の典礼の違いをどう書いたらよいかと悩んでいる、と魔法使いは判断されて、私めを遣わされたのだが、それで状況はお間違いないだろうか？

レナードさんは、手にしたメモというにはあまりにも仰々しい羊皮紙のようなものを見ながら話しかけてきた。

あたしはそれにコクコクとうなずいた。

しかし、今の説明超嫌味臭い。

レナードさんアーシエ姫のこと好きだったのかしら？

タンジールのことめっちゃ見下していたわねー。

いいもんなのかしらー。だってアチラの方が大国なんですよ？

強いらしいし。ま、あたしには実害ないし。いいか。

では、説明に入ります。

タンジールは現在の王で3代目。姫のお相手がもし即位ということでしたら、4代目となります。

建国よりまだ50年ほどになります。

へー。若い国なんだねえ。それであんなに広い土地を治められるならすごいじゃん。

レナードさんの言う言葉を昔獲った杵柄で速記もどきで書き付けていく。

メモ《チラシのうら》から顔を上げて続きを促す。

ただいまのタンジールの版図となったのは現王の時代になってからであり、その前のタンジールは、ただの地方豪族に毛が生えた程度でございまして、国交もほとんど結んでおらず、正式な国家と神国から認められましたのは、カタグ暦2064年、今よりたった17年ほど前のことでございます。

ほー。倒れちゃった方ってそんなすごい方だったのねえ。

こっちで言えば、モンゴル帝国とかナポレオンみたいな感じかしら
ー。

タンジールの現王にはお子様が3人おられ、王子一人にその姉上に
当たられる方が2名。

すべて軍功のあつた家臣かその子息に嫁しておられます。

かの国考え方では姫には相続権はなく、そのお相手の家の格に準じた扱いを受けていらつしやるそうです。

姫様のお相手になられました、フィジョン王子ですが、15歳の時に現王の右腕であつた騎士公爵、これは、かの国だけの爵位でして、武功のあつた將軍クラスに与えた称号で、その後を継いだものが従軍しなくては消滅、従軍しても軍功なきものは廃嫡という、一代限りにかなり近い称号だそうでございます。そのの、娘（当時17歳）を娶り、2年後第一子、コラリス姫を設けたが妃は出産の肥立ちがわるく死亡。姫は順調に育たれて今年3歳になられる。

ウチの姫がなんで後添えで。15歳にして3歳の子持ちにつ。

・・・失礼いたしました。

そりゃあ、アーシエちゃんの立場はつらいよねー。

で、今まで碌な国家扱いをしてこれなかったタンジールには国家継承におけるしきたり、外交儀礼などなどのノウハウが蓄積されておらんのですつ。

きつとタンジールのことですから、『近隣の諸国の代表集まるし、ついでに戴冠式もやつとくか』くらいの認識しかないと思われまます。今までの継承も、命にかかわるほどの怪我をして帰国した初代の王が二代目に血塗られた剣を渡して事実上の継承だった、という故事にならつて、その初代の王愛用の剣を渡したら『継承』としていたようです。

つてことは、会社で「まあ、後はよろしく頼む」みたいに引き継ぎの書類に判子押して握手。で、部長交代。みたいな感じより簡単に継承されてきたつてのかい？

いい加減というか大雑把というか。書類ない分いい加減かも。

判子わたして、「じゃ、たのまー」みたいな感じにちいかいのかな？

それが王家継承だなんていい加減過ぎるよ・・・フィジョン君。自己完結しながらフムフムうなずいた。

それに引き換え、わがアルシエス国は今年で建国716年目を迎えます。

神国、クニネム国について3番目に古い国家です。アーシエラーナ様のお父上であられる現王陛下で63代目を数えております。継承式も盛大に行われます。しきたりもたくさんございまして、準備にも2〜3年の歳月を費やします。

ほーほー。そういやウチの今上陛下のときも凄い織物とか晚餐とか招待客だとかあったね。

もう20年位前だったけどかなり華やかっばかったわなー。

皇太子殿下と雅子妃殿下の時の結婚も華やかでしたしねー。

あれ？もしや、タンジールってものすごい大雑把にみんな集まるからいいだろう？

とか思っている？

お祝いだし同時にやっちゃう？みたいなノリなの？

それって、国家的にめっちゃ準備に時間かかるし、出席者もそれに御支度があるんじゃない？

二倍どころか3〜4倍の労力が要りそうな・・・。

あたしは、その規模とか式典の警備とか式進行の調整とか。

同時にやっちゃうの？

それとも日を改めるの？

そんなことを考えて呆然とした。

そして主役の一人であるアーシエちゃんが一番最初に心配した、お衣装。

主役それも女性のお衣装によって式典の格が決まるといっても過言ではないよなあ。

あたし設定中世末期ヨーロッパあたりっぽい感じ。にしていたし。

おわかりいただけましたか？

あの王子がやらかそうとしていることの重大さが。

その上、王子ときたら！！

『あー、レナード。その先はだめだよー。』

学校の校内放送のようにちよつと響いた声で聞こえてきた声。誰これ？という思いも込めて首をかしげる。

『作者さん《だて しい》にはそのうちお目にかかりますよ。今は魔法使いとでもー』

なんか気の抜けた声だなあ。
ふむふむ。

つまり王子様は成り上がり発言&行動全開中でイタイってことなのか。

自分の結婚式でもあり、長い歴史のある国から嫁いでくるアーシエちゃんはそれをどうにか近隣諸国に失礼に当たらない程度の見栄えのする式典ものにしなくちゃいけない上、自分の支度も整えなくちゃいけないのか。

そりゃ、固まるわな。まだ15歳なんだしねえ。

お分かりいただけましたでしょうか？伊達殿。

眉間にグワつとしわを刻んだレナードさんが怒りを抑えきれずにこちちを見てきた。

そりゃ、こつちだって社会人暦10年を超えるオトナですし。冠婚葬祭色々庶民レベルではあります。が経験しきてますし。

こんな結婚式や葬式絶対ヤダ、恥ずかしすぎつつても何個か見えますし。

それを国家レベルで、成り上がり国家がやっちゃったとしたら。そりゃー。恥ずかしいわなー！

それじゃ済まないし。今後の外交の場で不利になるかもしれないよね。

下手すりゃアルシエスまでとばっちり、だよねえ。婚約して3年だもんね。

その間になんて指導しなかった？なんて嫌味とか言われそう。

うわー、うわー。大変じゃん！！

あたしは頭を抱えてしまった。

これ、どうやって10日で収束させりゃいいのよ。

『作者殿。姫の幸せのためがんばってくださいねー』
魔法使いの声が遠くなる。

以上、現状報告でございます。伊達殿。姫をアーシエ様をどうかお救いください。

レナードさんがものすごく美しく45度に腰を折る。

それと共にまるでTVのスイッチを切ったときのようにモーターアルともどきの姿が掻き消えた。

「フィジョンのばかやろう。爆弾発言のせいで、プロット台無しじやねえかよ」

あたしはメモ《ちらしのウラ》を眺めながらそういった。

そして人物設定をまとめてある、ノート《ネタちょう》を取り出すと。

フィジョンのページに設定を新たに書き込んだ。

閑話休題

番外編 説明臭い何か『典礼について』(後書き)

次から本編に戻ります。すいません。

1・5（前書き）

長くなりましたので2つに分けました。
評価ポイント。お気に入り登録ありがとうございます。

もうすぐ始まるはずの、私を正式に紹介するための晩餐会。その控え室で私は夫となる人にあつた。

たれ目が全体のバランスを残念にしまった、マツチヨ・メン。それがこの軍事大国の唯一の王子サマ。フィジョン殿下。で、私は10日後にこの人と結婚することになっていて。

私が頭の中で走馬灯をグルグルめぐらしているのは、その結婚式と一緒に戴冠式をやると、この残念なイケメンマツチヨ、略してザツチヨ、がこんなところで言い出したから。

そして、戴冠式の話は、私、すなわち結婚相手であり、『ついでに王妃にならねえ?』と言うべき相手にはまったく知らされてなかつた上、おそらく両親にも伝わっていないだろう。

ということは、この国は私を、私の祖国をないがしろにする、と宣言しているようなもの。

しかし、面と向かつてこの王子を叱責するわけにはいかない。ここで争いなど起こせばそれこそ外交問題になる。

たとえそれが義憤によるものだといえども、だ。

私はゆっくりと手に持ったティーカップをソーサーにもどす。

ここでどう対処するかによって私の評価もアルシエスの評価も決まってしまうかもしれない。

なんか、もしかして試されてる?私?

この国に入った時点で私は、良くも悪くも『殿下のヨメ』であり、この国に属するものともなる。つまり、面と向かつて王位継承者を叱責することは不敬罪で処分されても文句はいえないのだ。

もしこれで近くの警護の兵士などに当り散らせば、祖国の評判を落

としかねない。

私が直に叱責しても大丈夫なほどの高位の者。

そこに、いるじゃない。

私は内心ほくそえんだ。

バシン！

私は怒りを込めて手にした扇で椅子の肘掛をたたいた。

その音に部屋にいる全員が目が集まる。

ターゲットも。

私は押さえに抑えた怒りを声にした。

ちよつとまがつてしまった扇を少しだけ広げて口に当てると、ターゲットとなった男をにらみつけてゆっくりと口を開いた。

「クラクスー大臣。これはどういうことですか？」

このような大事を私を迎えにいらっしやるとき一言もおっしやいませんでしたわよね？

確かにアルシエスは小国ですが、このようにないがしろにされるとはおもいもありませんでしたわ。」

私はクラクスーをしかりながら扇で片目でチラリと王子を見やった。王子は私の言うことを聞いてはいるが、その表情に変化はまったく見られない。

つまりこれは、アルシエスを属国とみなして格下の扱いをしていると王子自身がいつているようなものなのだ。

焦るとか、取り繕うとかそういう行動は一切ない。

それどころか何で私が怒るのかわからないというかのようにこっちをみてきた。

この人、何考えているのかしら。

でも、ここは抗議しないと外交ならば対等が基本。

対等に扱う必要もないという、意思表示なのだとしたら。

ここは怒りを見せておかないと、でもキーキー怒っても大人気ないし。

そうだ嫌味よ！嫌味がましてやるわ！！

クラクスー大臣が言い訳をしようと口を開きかけた途端。

第二の爆弾が王子様から投下されることを私たちはしらなかつた。

1・5 (後書き)

どれだけ、王子視点なしで行けるか。
変な意地になってきています。

1・6（前書き）

行事というのは、行事が始まる前までに八割の作業が終わっている
もんです。

ですから、前置きは長いのです。

「大丈夫だ。姫の国をないがしろにしているわけではない。戴冠式のことを知っているのは王・王妃・俺以外では姫、あなたが始

めてだ。」

扇をもっていない手をとって王子が言った言葉にまた私は固まりかけて、なんとか自分をたもった。奇跡的に。

目の前が少しチ力チ力する。気を失わなくて本当によかった。

この人は招待客に伝えるという最低限のマナーすら知らないってこと、なのかな？

「王子、それ、冗談です、よ、ね？」

手の中で扇が悲鳴をあげるかのようにミシツといった。

「冗談ではない。今日晩餐会のスピーチで発表の予定だったのだが、それでは姫にフェアではないかと思って先に知らせたのだが

」。

「あ、ありがとう・・・じ、ざい、ます？」

少しでも早く知らせてくれたことはありがたいのだが。

これはありがたいところなんだろうか？

晩餐会で倒れるよりマシってところかしら。

それよりも気になることがある。

「あの、王子様？」

お礼に疑問符が付いていることに気が付いた王子様が私を見る。

その視線にちよつと戸惑いながらもう一度疑問を投げかける。

「ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんなりと、姫」

「あの、いつ戴冠式をやるって御決めになったのですか？」

「ああ、3日ほど前だったか」

「はかー。4日ほど前の私本当にはかー。」

温泉でピカピカツルツルになってる暇なんてなかったじゃないかー。せめてその時点で知っていたら。もう少し何とかできたのに。

温泉でのんびりしてる暇なんてなかったじゃないの！

てか決まったら早馬でもなんでもいいから教えてくれればいいのに。

私は自分が悔しくて、少し涙目になりながらも王子を見上げながらにらみつけた。

すこし王子がひるんだのみていい気味だとおもった。

「戴冠式と一緒にやろうと思ったのは、国王陛下を見舞いに行った時に陛下のほうから譲位を伝えられて、一緒にやった方がいい

のではないかと城に帰還してから思いついたのだ。その了解を得るために陛下と手紙でやり取りしていた。

すまない、浅慮だった。貴方にも伝えるべきだったのだな。」

私にもだけど、周辺諸国にもだるー！

という叫びを私は飲み込んだ。

せめて、此の事をアルシエスに伝えないと。
手の中の扇を握り締めると、キシツと音をたてた。

「王子、申し訳ないのですが、ちょっと打ち合わせを侍女としなくてはなりませんので、晚餐を10コニほど遅らせていただけな

いでしょうか？」

「何か、必要なのか？」

王子が心配そうにいう。

必要なものだらけだよ、決まってるだろ。

戴冠式の衣装どうすんだよ。国許にも連絡しなくちゃいけないし。時間が惜しいんだよ。

「ええ、実は扇を壊してしまいました。侍女にとりにやりたいと思うのですが。」

そういうと今まで手に持っていた扇をアンナに渡した。

「お兄様にもらった物をもってきてね、アンナ」

そういうと、アンナはすっとお辞儀をして出て行った。

こうして行かせてしまえば、晚餐は延期せざるをえない。

開始の遅れを伝えるために何人かの侍従もアンナとともに出て行った。

ごめんなさい準備にあたっていらっしゃる方々。でも王子様が悪いんだからね。私を怨まないでね。

『おにい様にもらったものを持ってきてね』っていうのは重大事がおきたときに使う、アンナと二人の間で決めた暗号みたいなものだ。国許に連絡を。という意味になる。

そうして王子に向き直ると、私は普通の笑顔を貼り付けてきいた。

「お待ちさせる間、お伺いしたいことがあるのですけれど。」
私たちが歓談体制に入ったのを見ると、クラクスーが侍従を呼んでなにやら密談している。

結婚前の私たちを二人にするわけにはいかないものね。

侍従やメイドがいるけれど、彼らはとめる権限をもたないしね。

侍女でもあり、貴婦人でもあるアンナが帰ってくるまではお目付け役としてクラクスーは動けない。

さまあみさらせ。おほほほ。

「なんなりと、姫」

王子がこちらをみる。

しっかし、きれいな緑の目だなあ。うらやましい。

そのきれいな目に映る見栄えのしない自分が目の中に浮いたごみのように感じる。

姉さまくらい綺麗だったらよかったのになあ。

こんな綺麗な目に映るのは正直いたたまれない気持ちになる。

「まずお伺いしたいのですけれど。」

姫君にいつお会いできますか？」

その途端王子の目が少しつりあがった。

やべ、地雷？

ここは知らぬ存ぜぬで15歳の少女のふり。

「私、母としてではなく、お友達か姉妹のように仲良くできたらと思っています。」

丁度、大兄さま・王太子殿下のお子様が同じ年ですし、国許でも

なんどか遊び相手を務めたりいたしましたのよ。お会いできるのを楽しみにしてまいりましたの？王子に似ていらっしやいますの？」「

3歳だつていうし、可愛い盛りの子だというし。

色々おもちゃやドレスなんかも持ってきたしね。

なんか、王子どころかクラクサーの表情も冴えないけど。どうしたのかしら？

「姫。娘は・・・そうだな、かなり人見知りが激しいのだ。

それに・・・身体もあまり丈夫ではない。

式が終わったら逢わせるつもりでいたのだが。」

歯切れが悪いわね。なにかあるのかしら？

まあ、おいおいわかるでしょう。

「そうでしたの。よく存じ上げないのに浮かれてもうしわけありません。

わたくし、末っ子でしたので、妹ができるのだと思って楽しみにしておりましたの。

浮かれて申し訳ありません」

私も少し寂しげにしてみる。

この国、少なくともこの姫は色々ナーバスになるポイントなんだろうね。

今度から気をつけよう。

「いや、姫、やさしいのだな」

そういつて私を見る。

くそー、なんだその「とつてこいを褒めて？」といってる犬みたい
な瞳は。

「いえ、よく知りもしないで出すぎた真似をいたしました」
そういつてとりあえず笑った。
娘という地雷があることがわかっただけでもここはヨシとしよう。

1・6(後書き)

10コニ(時間単位)＝1コニ5分くらい。

つまり一時間ほど落ち着く時間がほしいってことですね。

あと姫さまは「番外編」の内容をご存じありません。

1・7 (前書き)

色々資料を読んでいたらよけいに頭が混乱しました。
戴冠式・結婚式の資料は本当に読んでいて楽しいのです。

「あの、殿下。お伺いいたしたいことがまだまだたくさんあるのですが、続けてもよろしいですか？」

私はふわふわに重なったシフォンチュールのドレスのひだの中からメモ用紙と簡易ペンをとりだした。

初めての晩餐会のしきたりの違いをメモするためにもってきたんだけど、今使わずにいつ使う！的なものになってしまった。こっさりメモポケット作ってもらってよかった。

ドレスメーカーのスーリア夫人には、

「普通なら化粧道具入れとか、ハンカチ入れ、サツシユ入れとかの可愛い隠しポケットの依頼だったり、アヤシイところでは護身用ナイフ入れとか、百歩譲ってあんなこんな薬入れとか、をドレスに仕込んでくれ、って言うならわかりますけど。姫様。メモ用紙入れとインクが染みださないようなカバーとか……。ホント色気も素っ気もない依頼をくださいますよね。」とため息交じりに呆れられたものだが、作ってもらって本当によかったわ。

もう外聞なんてかまってるらるか。

あと10日で人生の一大イベントを2個同時にこなさなくちゃならない上、ここは完全アウェイ。

右も左もわからない場所ときたもんだ。

誰に何を頼めばいいのかもわからないし、そもそも私に指揮権が少しでもあるのかもわからない。

そんな場所で、諸外国の要人の目の前で失態なんかできるものか。

国元じゃ、典礼の姫とか呼ばれて、何かしら行事がある時の女性のドレスコードの基本とも言われたくらいで、そのためにいつも誰よりも一番に式典用ドレスも発注しなくちゃならなくて大変だったん

だから。

そんな私が、場違いでハズしたドレスなんかで式典に参加なんかできません。

私のアイデンティティの問題なんだから。

断れるものなら断って見る。塩とともに荷車に乗ってでも帰ってやる。

そんな決意をまなざしに込めながら王子に対した。

こうなったら多少のマナー違反は目をつぶらなくちゃね。

結婚前の男女が同じイスに腰掛けているだけでもすでに十分、マナーに反しているんだし。

王子はゆったりとグラスを揺らしながら私にうなずいて見せた。

なんだコイツこの優越的な態度は、本当はオマエが一番あわてなくちゃいけないんじゃないの？

内心むっとしながら声には出さないように質問を続けることにした。かんしゃくを起こすのはいつだってできる、いまはこの状況で少しでもいい方向に持っていくことができるように行動しなくちゃ。

恥をかくのはコイツだけじゃない。

私や国元も恥をかくことになるんだし。

もし少しでも恥をかくようなことがあったら聖堂前離婚してやる。

頭の中でもすごい悪口を目の前のマツチヨ王子につきつけながら、私は曖昧な微笑みを浮かべて王子に質問することにした。

「この国のしきたりについて知らないことが多いのですけれど、戴冠式とはどのようなになるものなんでしょう？」

我が国では神国よりそれなりの神官殿をお呼びして戴冠してもらい、近隣にも知らせをしたりしてかなり盛大にやるもの、ときいており

ますけど。そういうしきたりに詳しい官職のかたとかはこの国にはいらっしやいませんか？

「ぜひお会いして、この国のしきたりなどきちんとおうかがいしたいんです。殿下に恥をかかせたくはございませんので。できれば本当に今すぐに。」

「今すぐ？そんなにいそぐのだ？なぜ？」

王子はそのたれ目から繰り出される視線は睨みつけてるようだけれど、お預け食らった犬のように首をかしげるところでその威力は半減しとるわ、必要だからに決まってるだろう。

「私も式典の当事者です。それも戴冠式的时候は殿下のおそばにいらなくてはなりませんでしょう？」

「慣れない進行で失敗して恥をかきたくはありませんもの。」

「すくなくとも式次第が詳しく知りたいんじゃない。式次第の内容を見れば大体なに着ればいいのか見当がつくんだよ。おしえろや。この鈍感ザツチヨメンめ。」

「ああ、それなら心配することはない。」

「なにそれ。たつてりやカカシでもいってことですか？」

「私が首をかしげていると、また近距離で爆弾が落とされた。」

「しきたりなんてものは、この国にはないからな。だからしきたりに詳しい官職などおいてない、あえて言えば父上母上か。」
それを聞いたとたん、目の前が暗くなった。

「なんですとー！」

視界の60%位が暗くなった。久しぶりに倒れると思った。前のめりにぐらつく、ヤバイ。

「姫様」

ふらついた私を支えてくれたのは目の前のマツチヨではなく、侍女のアンナと一緒に駆けつけてきた、騎士団長。その腕の中で彼にだけ聞こえるようにひとことささやくと私はゆっくりと身を起こした。途中で、隣の王子殿下を一瞬睨みつけた。

このザツチヨ。役に立たねえ筋肉ばっか付けやがって。隣に座ってる女一人ささえられねえのか。

どんどん私の中で未来の旦那様に対する点が辛くなっていくのはなぜでしょう。

1・7 (後書き)

どんどん姫様の口が悪くなっていきます。
どうしてなんだろう・・・。

1 - 8 (前書き)

お読みいただいております。

お気に入りに入れていただいたり、POINTもありがとうございます。

何よりも励みになります。

さて、ご招待する時、席次や招待する人を絞り込むのは大変です。

最近のマナーやしきたりを軽視する方も多いですが、その決まりごとがどうして今まで受け継がれてきたのかとか考えるのも新しい視点を手に入れるチャンスだと思います。是非色々調べてみてくださいね。

「では、殿下。私を式典の責任者にしていただけないでしょうか？」私の口から滑りてた言葉に自分でも少しびつくりする。でも、考えてみるとそれが一番いい方法のような気がしてきた。騎士の肩にすがりながら身をゆっくりと起こす。そして、なるべく目に力を入れて王子様に訴える。

その滑り出た私の思いつきの言葉に私を支え起こしてくれた騎士が一瞬ちよっただけ身を固くする。

「ごめん。あとで説明するから、お願いまかせて。」私は彼から身を放す瞬間こっそりそうささやいて先ほど作ったメモを肩当てと方の間にさしこんだ

「ありがとう。カルロ。今頃旅の疲れが出たのかしら？少しめまいが。」
「そう言つて勢いをつけて身を放した。そして支えてくれた礼に微笑む。」

「いえ、間に合つて何よりでございます、姫。お加減の方は大丈夫ですか？ 晩餐会を中止にさせていただいたほうがよろしいのでは？」
本当に心配そうに私の前に膝をついたままカルロがそう進言した。その手はまだ私の肩を軽くつかんだままだ。それなのに彼の視線は私ではなく隣の王子にくぎ付け。なんか周りの気温が下がったような気がするんですけど。もしかしてにらみ合ってる？ 私からはみえないんだけどー。

「大丈夫よカル口。まだ始まるまで時間もあることですし。」
そう言つて彼から身を少し放した。

私は多分にらみ合つたままの二人が放つ空気がどんどん冷えて行くのが怖くて、とりあえず間に入つてみたんだけど、なんか余計冷えた気がするよ。

二人にそれぞれ視線を投げかけると二人からにらみ返された。なんで？

ちよつと状況が呑みこめずに困っていると、後ろからスツと扇が差し出されるとともに優しい声がかけられた。

「姫様。」

アンナがそう一言声をかけてくれたので、ほつとして微笑みながらアンナを見る。

ありがとうアンナ。視線に感謝を込める。

そして、アンナから差し出された新しい扇を受け取つた。

その扇を優雅に音もたてずに開いて、口元に持っていく。

「しかして、殿下。おまかせいただけますの？」

言葉を選んで、それでも優雅さと無邪気さは失うことなく威厳を込めて。

ふんわりとした微笑みを目にしっかりと宿して。

しかしその口調は毅然と。

”断れるもんなら断つて見やがれ。”という思いを込めて。

ぶつちやけ言わせてもらうと、曲がりなりにも自国で『典礼の姫』とまで呼ばれた私が。

こんな典礼の初歩の初歩も知らない国がみすみす目の前で私を巻き込んで大失態をやらかす片棒を担ぐのはまっぴらなの。

近隣諸国だって、私にお伺いの手紙をよこすことだつてあるのよ？

みつともない結婚式や戴冠式なんかやらかしたら、評判ガタ落ちのうえ後ろ指さされるかもしれないじゃないの。

この王子サマのマナーもなってるないし。

このままこの人が国王となって外交儀礼がちゃんと出来るとは思えないのよね。

すくなくとも私がこっぴどくかきしい思いをしない程度には取り繕っていただかないと。

とりあえずは、この100日で。

「もしお断りになるようでしたら、きつと私より式典その他諸々に精通していらっしやるのでしょうかね。是非ご紹介いただきたいものですわ。」

にーにーにーにー。

覚悟しとけよ。王子サマ。

典礼の姫と国内外でお世辞やおべっかで呼ばれていたわけではないんですのよ。

「あ、私の指示を聞いてくださる官吏ももちろん、付けていただけるのですわよね？」

そう駄目押すと、広げた扇を一瞬でたたむ。

そして、今気がついたかのように、魔時計に目をやる。

「あら、丁度100コ二経ちましたわね。晚餐に御案内いただけますか？」

そう言っつてすつと手を差し出した。

悔しそうに睨みつけたところで、そんなもん何の役にもたちませんわ。

交渉は駆け引き。

剣よりも口先のほうが強いこともあるのですから。

あらあら、空のグラスを握りつぶすなんて。

私の王子サマは、なんて野蛮なんでしょう。

1 - 8 (後書き)

20歳の男子(子持ち)が15の小娘に言い返せないのはつらいだろっね。

ごめんね。王子様。次回は王子様のターン・・・になるといいね。
(希望的観測)

1・9（前書き）

ようやく晩餐会の開始〜〜

基本は日本の宮中晩さん会の様子をもとに書いております。
間違っていたり、適当なところもあると思います。

しかし、ザツチヨとツン姫で「あまあま」になる（予定）がどんど
んずれて・・・

私の差し出した手を立ちあがった王子さまがとる。
その手を支えにしたように立ち上がる私。

でもね、本当の淑女は全体重を相手に任せたりしないのよ。
ふんわりと体重の三割位を相手に預けて立ち上がるのさ。

淑女は、自分で立ち上げられるだけの体力を持っている、細マッチョが基本ですわ。

もちろん柔らかいところは柔らかく、ですけれどね。

私が立ち上がるのを見計らったかのようにファンファーレが鳴り響き、晩餐会場への扉が開かれる。

さあ、正式なお披露目の始まり始まり。多分完全アウェイだけど、頑張るよ。

開かれた扉の先は今宵のための大広間、晩餐会仕様になっているはず。
っことはこの国がどういいう感じで公式の場をしつらえているかわかるってことよねー。

まあ基本は3パターンだからそこからバリエーションをかませるか
どうか、がセンスの見せどころだよな。

この国はどうもてなすつもりなのかなあ。

晩餐会会場には、聞いた話では二、三百人のこの国の貴族。それに近隣諸国の大使の姿。

私の提示した100コニの間にある程度の情報は彼らに伝わっただろうか。

まあ、どこの国も諜報活動はしてるだろうから、ある程度の情報はつかんでいるんだろうけれど。

私はその中をしずしずと進みたかったんだけど！

私の手を引くこのザッチョ王子サマがズツカズツカ大股で歩くもんだから、こちらは小走りになってしまった。

小走りだって優雅に歩いてるように見せますわよ。それぐらいできなくて、どうします？

この戦馬鹿、少しは女に気を使え。

エスコートもできなくて前のヨメはよく我慢したな。

もしかして、扱いが荒くて繊細もしくは病弱だった先妻さんは儂くなっちゃったのかしら。

てか、この行動はもしかしなくてもさっきまでの控室でのイヤミへの意趣返し？

だとしたら王子サマ。相当ガキくさいわー。

あつという間に主賓の席に着く。

ゆったりと手を放し・・・とかおもったらザッチョ、振り切りやがったよ。

こんな衆人環視のなかで、こんな心のままにふるまっていたら格好の噂話のエサになるじゃねーか。

ま、それならそれで。

必殺『実家に帰らせていただきます』か

小柄で年より幼く見られがちのこの容姿を利用して『王子サマが苛

める』『大きすぎて怖い』とか震えて見せるのもいいかな。表面を取り繕えなくて損するのは、どちらにしるザツチヨ王子サマだしー。

さて、まず、ワタクシ達の婚約を祝うスピーチが両国代表からあり。そのたびに乾杯。にっこりとほほ笑んで皆様に御挨拶。

なるべくバカっぽく、幼く、そしてトボケて見えるようにね。

そしていよいよ。

大問題の王子サマからの御挨拶。

まさか、この王子サマ、スピーチできないとかないわよね？その可能性に目の前がちょっと暗くなった。

スピーチ用の原稿を取り出すのかとおもいきや、残念なマツチヨの王子サマはそのまましゃべり始めた。

おいおい、覚え暗記しているとしても、カンペ位用意しようね。今までの大使達だってカンペチラ見しながらやってたでしょうが。彼らの立場考えてやんなよ。ってかコイツ、もしかしなくても俺様属性なの？なんて面倒くさい性質なの！はらはらしながらそのスピーチを聞いた。

王子サマは非常に偉そうに上から目線で婚約の祝いの礼を述べる。そこからスピーチは始まった。

まあ、国内中心の席だし。合格すれすれ、六十五点。

両国の未長い平和と繁栄を……祈らないの？

いきなり、戴冠式を同時開催を発表かい！

各国大使に国元への連絡を要請。

もう代表団国元出発しちゃって間に合わない国もあるとおもうんですけどー。

ダメダ……ダメダコイツ。

比喩ではなく本当に傷み始めた頭を抱えそうになりながら遠い目で、国元のお父様・お母様を思う。

とうさま、かあさま、ワタクシやって行ける自信がありません。帰ってもイイデスカ？

そんな物思いにふけて、魂を実家の両親のもとへ飛ばしていた私が現実に戻されたのは、未来の旦那様がいきなり乾杯！をやらかした時のこと。

こんなにぼんやりしていなければ止められたのに、と悔やむ。

冷たい目線を隣の未来の旦那様に名流す。

もう、点数……どんなに甘く点つけてもマイナスなんです。しきたりもなにもあったもんじゃないわ。

飯にも「王室主催」の「晩餐会」でこんなグダグダが起こるなんて！こうなったら何としても、あと9日でマナーやしきたりをこの戦バカに仕込んでやるわ。

『典礼の姫の名に賭けても！』
私は心の中で握りこぶしを握った。

あと9日。

もう少し洗練された晩餐会を結婚祝賀の際には開いてみせますと
もさ。

乾杯が終わったところで、私は席につくと、ペンと紙を取り出して
せつせとテーブルの下でメモを取り始めた。

必要なもの、宮廷での付け焼刃でも構わないからの教育。
最初のメモはそう書きつけられた。

私の手元が見えるのは隣に座った王子さまだけ。

その王子様は私に背を向けて、私のすることなんてどうでもいいと
いう不貞腐れた態度でお酒をかつくらっている。
酔って醜態をさらさなければどうでもいいです。

私の邪魔だけはしないでくださいね。

さて、リネンの新調の確認・・・カトラリーのチェック・・・ご婦人
の洋服のダサさもなんとかしないとね。

軍服・モールとかもちゃんと人数分あるのかしら？

いざとなったらウチから連れてきた兵士を使いましょう。

あとは魔法使いに連絡をとって、無理でも色々転送してもらわな
くちやね。

あ、この国に転送の魔法陣・・・あるのかしら？

にこやかにあいさつに答えながら私の両手は食べるよりももっぱら
メモに費やされた。

1 - 9 (後書き)

ザツチヨ、サイテー。
が姫の印象。

なんだこの小うるさい小娘は。
が王子の印象。

ほんと糖分はどこに・・・ごめんなさい・・・

1 - 10 (前書き)

間があいてしまいました。

ヨーロッパの国のマナーもその国によって微妙にちがうんですよ。
ちなみに日本は英国準拠、ちょっとロシア入り。だそうです。

さて、とりあえず挨拶も終わり、楽しいお食事タイムの始まりです。色々視線を感じるけどそれはまあ、ほおっておこう。色々ストレス感じるとご飯おいしくないしね。

それでも私はさりげなく周囲を見回しながら料理を口に運ぶ。ウチの国はここよりも温暖で海洋国家でもあるので、それまでのこつてり系煮込み料理よりも素材の味を生かしたシンプルな料理法がはやってる。

しかしこちらでは素材の問題などもあってそうもいかないだろう、手の込んだこつてり系ものが多い。

味が濃い、塩味がきかせない分油分でこつてりと料理されていることが多い。

いや、コースのうち1つとか2つならまだ食べられるけど。

まず、チーズふんだんにかけた温野菜サラダ（つまりグラタン一歩手前）。

次が川魚の素揚げ、あんかけソース（つまり油味）

次がメインのお肉。なんでこんなに厚く切った！って感じの焼いて塩かけただけのもの。

ここまで来て私の胃は悲鳴を上げた。

ただでさえコルセットで絞めてるのに、入るわけないじゃないのっ。

おなかにたまってしまうし、口の中がなんか油っぽい。

お酒で流し込むザツチヨにはこれでいいかもしれないけど、あたしにはきついわ。

お肉を頑張って三分の一くらい口にしたところで、そっとカトラリーを置く。

給仕が寄ってきたので、相談してみることにした。

「わたくし、まだお酒はたしなみませんの。口をすっきりさせる飲み物などありますかしら？」

乾杯のとき少しだけ傾けたグラスを示して、お水を要求する。

給仕は一瞬固まってから頭を下げてそそくさと下がっていった。

水はウチよりいいはずだし、楽しみ。

早くお水~~~~~。

口が粘っこいよ。塩っぱいし。

さて、次のお料理がくるまでは観察を続けるかな。

私の近くに座ってらっしゃるご婦人方のドレスのデザインは、と。ウチからみたら3〜4シーズン遅れ。

私が10歳のお披露目の時に着たドレスとそっくりなドレスを着た妙齡な、というか年増のご婦人がいらっしゃる。

べ、別に自慢じゃないが、あのデザインは幼児体型の10のこともだから似合うのであって、

もう社交界デビューを果たしたお姉さまが着るものじゃないと思う。はつきり言って痛い。

また隣の娘が着ているのはそのとき姉様が着ていた顔立ちがはつきりした美人限定（まちがっても私じゃドレスに負ける）のデザインだし。

はつきり言って似合っていないなあ。せめて色だけでももつと自分に合う色にすればいいのに。

他にも私や姉や母様のドレスをコピーした人がおおいなあ。

なんか恥ずかしい。

しっかし、これをドレスメーカーのリリが見たら卒倒しそう。つか片っ端から剥いで説教だな。

リリは今どこにいるんだろう。一応私の侍女としてつれて来たけど、もしこんなところ見たら凄いことになりそうだわ。

そして、心のメモ帳に『リリには舞踏会を見せないこと』という文言を刻んだ。

しかし、お水まだかなあ。

ぼんやりと、しかし微笑を絶やさぬまま、私は観察をつづけて、お水の到着を待っていた。

「姫、食が進みませぬか？」

そういつてダメ出しメモをせつせと心に書き留めている声をかけてきたのは、ええとさっき紹介された、だれだっけ、ああ宰相閣下。

「いえ、わたくしお酒をたしなみませんので、お水をお願いしたところなんです。お料理は本当においしゅうございます。」
そういつて微笑み返す。

まさか油っぽすぎておなかいっぱいともいえないし。

「ああ、姫。気がききませんで、申し訳ない。」
そういつてそばの給仕を呼びつけると、水の催促をしてくれた、いい人だ。

少なくとも王子よりは気が利くな。

そう思つてチラリとザツチヨ王子をみると、やはり自分勝手に飲み食いしてる。

もういい、お前には期待しない。

「さて姫。」

あれえ、社交辞令でおしまいじゃないの？

「正直にお伺いしたい。」

やだなー。ご飯のときに真剣な話するとまずくなるじゃん。

「典礼の姫と呼ばれて名高い姫から見てこの国の作法はいかがだろうか？忌憚なく言っていたらよかった」

えー。やだー。

一番最初に思っただのはその一言だった。

本当に忌憚なく言ったら、外交問題に発展しそうなくらいなダメ出しできますよ。

それでもよろしいのかしら。

まあ、外交に差しさわりのない程度で嫌味を交えて、くらいかねえ。

「そうですね。」

淑女の皆様方がわたくしを歓迎する意味で、わたくしの以前のドレスデザインのものを着ていただいているのに感謝いたしますわ。

特に、王子殿下とのご婚約がなりました10歳の時のドレスなど懐かしくまたその皆様のお優しい気持ちがうれしいですわ。

また、紳士の皆様方のお作法は、お血筋から考えますと、北方の古の大国フェルナータの儀礼にそっているものと思っておりますら、お皿の並べ方などが国と似ておられる。

また、晩餐会の進行などは、どちらかといえば、わが姉の嫁いだ西の国のようですね。

結婚式や戴冠はどのような典範でおやりになるのか、お聞きしたいものですわ。

それによってドレスも違ってまいりますし。どうおやりになるので

しょう、早くお聞かせくださいませ？　ねえ宰相閣下。」

と答えてあげた。

問題になるほどきつつい事は言っていないよ。

ウチの典礼部なんて私の顔見ると逃げ出すのもいるよ。

そいつは長続きしねえけど

そして、一気にまくしたててのどが渴いたので潤そうと近くにあった、グラスを取りあげて飲もうとして酒精のにおいに顔をしかめた、そうだ、まだ水ないんだっけ。とグラスをテーブルに戻してすこし遠ざける。

「…姫？」

そういつて宰相閣下が私に話しかけてくる。

気が付くと、さっきまでざわついていた会場がシーンとしている。

「お水はまだかしら？わたくし、のどが渴きました。」

給仕が控えている方に声をかける。

壁際に控えていた給仕の半数が脱兎のごとく出て行った。

一杯でいいんだけどな。

「それで、宰相閣下。どういう段取りですか？」

というか、式の主役である王子殿下はまあ、軍服ですみますからいいですけど。

わたくしの場合、支度に時間がかかりますのよ。

こちらにきてからこのような大事をお知らせくださるなんて、わたくしその場にそぐわぬ衣装で式典に出席して、恥をかかせて『典礼の姫などと呼ばれていても、あの程度だ』などと近隣諸国にいわせるおつもりで？」

そういつて手元の扇をパチンと鳴らすときつちり四分の一だけ開く

と口元に持っていった。

そして宰相にだけ聞かせるように小声で。

「正直わたくし、塩持って実家に帰らせていただきたくはありますわ。わたくしが10歳の時のデビュータント・ドレスのコピー着てるの貴方の奥方ですわよねえ。」

なんかの羞恥プレイですか？ てか御幾つですか？奥方。」

そうして、扇を口元からはずしてにっこり笑った。

「宰相閣下？段取りの方はいかがですか？」

「ここでご説明すると折角の晚餐がさめてしまつほど長くなりましよう。」

後ほど詳しいものにご説明にあがりますので、そちらに詳しい話はお聞きください。」

本当はここで追い詰めてあげてもよかつたんだけど、さすがにそこまでしたら悪いしね。

私は矛を収めることにして、ぱちんと扇をたたんだ。

「楽しみにしていますわ。あと10日しかないんですもの。」

式次第とか手順とかもきっちり決まっていますので教えていただくだけで済むのですわよね。

当然。」

「御前、失礼いたします。」

そういつてロマンスグレーのソフトマッチョの宰相閣下は下がって行ってしまった。

私的にはザツチヨ王子よりも好みだけに残念だわー。

すこし顔色悪かったようだけど、だいじょうぶかしらー。

そろそろ無理のきかないお年頃のようにお見受けしました。
好きなタイプだけに長生きしてくださいませね。

「失礼いたします」

そういつてやっと私の目の前にお水が置かれた。
それもグラス5つも。

こんなに要らないわ。

なんか違うのかしら？

「あ、ありがとう」

引きさがる給仕にお礼をいう。

そしてまた3つのグラスが差し出される。

なんかこの水違うの？

それとも意地悪ですか？

並んだ8つものグラスを一つ一つ確かめながら慎重に口をつけるグ
ラスを選ぶ。

そして一番きれいなグラスから水を飲んだ。

なんだただの水じゃん。

あの温泉宿で飲んだ水、美味しかったなあ。

そのうち運ばせるかな。

ふう、やれやれ。

まだコースは半分か。

私のお腹に入るんだらうか？

1 - 10 (後書き)

最近この話を「しっかり姫とザツチヨ」と呼んでいる自分がいます
でも姫まだ15歳なんですよー！

しっかりしろザツチヨ。ってか最近名前がうる覚えに（、ー、A；
）

1・111（前書き）

お久しぶりでございます。

実は書きすすめていたら二時間ドラマなみのサスペンスになってしまい、

それはどうかと思い、やめました。

もし需要がありましたら、IF、番外でUPするかもしれません。

さて、宰相閣下がいなくなってしまう、お話し相手がいなくなってしまうましたわ。

となりの王子様を見れば、どンドングラスを干してまだお料理3品目だというのに、

ボトル3本目なんてどれだけお酒強いの？

それとも若さにまかせてガンガン飲んで、地位にかこつけて暴れても隠ぺい？

どっちにしろ、この残念なマッチョ王子は、自分の地位におぼれている気がして少しヤバイ気がする。

この王子で実質3代目だというし、色々固定化した権力と不満分子が摩擦をおこしてもおかしくない。

そんな過渡期にあるようなあやうさがある。

こんなザツチョの巻き添えで断頭台とか幽閉とか冗談じゃないからねえ。

せいぜい平凡な王とかそこそこかしこい王になっていたただかないといけないよね。

うん、自分の命かかっているし。

なんとか調教・・・じゃなかったしつけ・・・でもなくて。

ええと。ああ、お勉強していただきましょう。

さて、そのためにも、この残念な王子様との会話を成立させなくてはね。

「あの、王子。今お話をしてもよろしいでしょうか？」

私にはこやかに丁寧に話しかけたが、王子は傾けたグラスから口を離そうともせずはこちらを見た。

なんだか、一々態度悪いわねえ、このザツチヨ。

「なんだ。」

グラスから少し口は離れたが、まだ手はグラスを握ったままだ。

やっぱしコイツ、作法を仕込まれてないんだ。

一人息子のボンボンだものねえ、仕方ないか。

なんかあれば逃亡で済ませてきたんだろっなあ。

「色々とお伺いしたいことがあるのですが。」

私はそれでもこやかに淑やかに話を続けた。

非礼にも礼儀で答える、相手のレベルに落ちたら負け。

マナーの教師の厳しい格言を胸の中で言い聞かせて態度をかえなかった。

「俺でわかることなら。」

面倒くさそうに、言い放つ王子。

まったく、私はあんたの臣下ではないっ。

臣下だとしてもこんな態度をとる者に心から頭を下げられるもんですか！

この国の文官は不幸だわねえ。

あのロマンズグレーの宰相閣下に同情した。

ウチに連れて帰ろうかしら！

「この国一番のドレスメーカーを御紹介くださいませんか？」

とりあえず、おばかな振りをして、女なら誰でも興味を持っていると思われる、

おしゃれの話題を振ってみた。

たくさんの美人さんと浮名を流していた王子のこと、

こんなにひどい劣化コピーしか作れないドレスメーカーよりいいところを知っているかもしれない。

「なんのつもりだ」

そんなにイライラしなくても、この話には裏の意味なんかありませんわよ。

「戴冠式をするのなら、この国のドレスを身にまといたいのですが。」

「国民受けは大事ですもの。」

民族衣装つばいドレスを仕立てたいものです。

こちらは毛織物が盛んだといいますし、そういう生地を使って民族衣装をベースにしたドレスをリリのアイディアで作りたいものです。

「俺はよく知らない、侍従にでもきけ」

「ああ、そうですね。」

会話を続けようという気にもなりませんか。

それならば、こちらにも考えがありますわよ。

世間話が嫌なら、本題にはいろいろじゃないの。

覚悟しなさいよ、ザツチヨ。

「そうさせていただきます。もうひとつよろしいでしょうか?」

私は手元にあつた扇を口元に寄せる。これで唇は読めない。

丁度次のコースの配ゼんのタイミングで、声も拾えないほどざわついている。

「なんだ、手短にな。」

またグラスを傾けやがったな。

手短にするが手加減はしない方向でいくよ。

「では手短かに。」

私は隣国の王女です、そなたごときにそのような無礼な口を利くのを黙っている訳には参りません。」

そう言つて、軽く扇でグラスを持つ手をはたいた。

「なにをするっ」

酔いと奇襲によつて反応できず、手をはたかれた王子は、私を睨みつけた。

「何をする、は私の台詞です。」

まだ、私の身分は隣国からの客です。

客に対してそんなぶつきらぼうで、適当な対応をされて、不快にならない者がおりましようか？

確かに私は、殿下が見なれた美人とはほど遠いとは思いますが、少しは真面目に私といえ、私が来た理由と向き合つてもよろしいのではありませんか？」

まったく、こんな気持ちのままにふるまう王族なんて、百害あつて一利なし。

早く革命でもして転覆しちゃったほうがいいよ、ロマンスグレーが素敵な宰相閣下。

すこし、ぎゃふんと言わせてやるか、

いままで誰にも厳しくされたことなさそうだなあ、この王子。坊やなのね、こんなでっかい図体して、なさけない。

「この、無礼者っ」

そう言つて私の扇を持った手をすごい力で握りこんだ。痛いなあ。アザになりそう。

それでも私は、王子を挑発するのをやめなかった。

この王子が自分とこの国をどれほど理解しているのか知りたかったから。

「腕をへしおりますか？殴りますか？幽閉しますか？いつそ切殺します？」

好きにすればよろしいですね。

その代わり、二度と諸外国には相手にされないでしょう。

確かにこの国は武力もあり、今は勢いもありますから、諸外国も静観しておりますよ。

しかし、どんな力もいつかは衰えます。

北の武王と異名をとられていた、国王陛下が弱られた今は、諸外国には好機。

いつでも虎視眈々と狙っている勢力が何処にでもあるでしょう？

そこで、歴史ある隣国の姫に大事があった。

なんてことになったら、もうどこの国もまともに交渉しようと思わず、同盟でも革命誘発でも暗殺でもして、この国をまた戦乱に戻し、あわよくば自分が覇者になろう。

受けてたたれます？

御立派ですね。しかし実際に戦う兵士やその家族のことを考えられますか？

王子が、身勝手な理由から隣国の可憐な姫を粗略に扱ったために戦になったのだ。

と聞いて、兵士の士気が揚がりますでしょうか？」

そこで私は一度話を切って、王子をにらみつけた。

震える手を隠しながらグラスを持ち上げ水をゆっくり飲み込んだ。そうしてふんわりと微笑んで見せた。

ここが正念場。この国にはそろそろ武だけでなく分をわきまえることを知らなくてはならないのだ。

多分、国元で世界各国のマナーを仕込まれたのはそのため。

それが私がここに来た理由。

帰ってきてもいい、と父も兄も言ってくれたのは多分、私でこの国を試すため、なのだと思う。

「私にだけではありません、これから様々な国の方が外交のために、偵察のために結婚式を見に来ます。

その時今のような態度を取られ続けるのなら、この国は長くない。

弱みを見せた途端攻め込まれて内乱へと逆戻りでしょうね。

そうならないためにも、王子にはぜひとも外交マナーを身につけていただきたいのです。

戴冠式のある10日後までに。

外交の場で、知らないは通じないのです。

足もとをすくおうとする者どもからこの国を守るためです。戦場で盾を持つようなものです。

嫌でも覚えていただきます。

もう王国と神国から認められて20年になろうとしているのです。いい加減、馬鹿にされていることに気づかれませ。

この国一のドレスメーカー、どう見てもコピーが得意なだけの2流以下ではありませんか。

それも、たぶんわたくしが不快になるのを知った上で、我が国で昔流行ったドレスを似合わない方に着せるなんて。

それこそ、この国が成り上がりであると言っているようなものでしょう?」

一気にしゃべって疲れたので息継ぎのためにすこし、間をおいた。その間に、王子がまた私の手を圧迫する。

ああ、ヒビぐらい入ったかも。

「この・・・」

もう一方の手で私の肩をつかもうとする。

その手におびえるように私は大げさに身をすくませる。

上座にある私たちの席は招待客から丸見えだ。

もしこんな衆人環視のなかでの暴力などがあつたら、この国の信用は地に落ちる。

ここには各国大使の姿もあるのだから。

視線に気がついた王子は私の手首を離した。

「さあ、怒るならどうぞ、大声で。

貴方のその図体で、私のような小柄な女を殴りますか?

いいでしょう。その時は周辺国家との全面戦争を覚悟なさいませ。

私は、それだけのものを背負ってここに参りました。

あなたの一時の怒りと平和と、どちらをおとりになりますの?」

私は、痛む手首をさすりながらもう一度、王子を睨みつけて言い切った。

ドレスに隠れた足はガタガタと震えている。

それでも、私は目に力を入れるのをやめなかった。

「小娘のクセにっ!

俺がどれだけ努力していると!」

でたよ、『僕ちゃんは努力してるんだ』アピール。

そんなもん、身につけてなくては、なんの役にも立たないのだよ。坊や。

「仮にも隣国の姫を小娘呼ばわりとは。私が努力していない、とでも?」

それに努力なら誰でもするものでしょう? 結果が伴わない努力など、無駄でしかありませんわ。」

私は、馬鹿にした口調で切って捨てる。

努力なんざだれでもしてるわ。

「なんの力もない小娘如き一人や二人いなくなったところで、外交問題などになるものか!」

おや逆切れですか、いいでしょう。

こいつは使えない、それだけの小さい器だ、と思われるだけだし。

「あら、お忘れですの?」

わたくし、こつ見えても、神王陛下の儀式にもアドバイスを求められるほどの、

『典礼の姫』なんですのよ。いなくなれば諸外国の各儀式が滞るといわれるほどの。」

私は、とてもかっこいい神王陛下を思い浮かべながら、シャンと背筋を伸ばして受けてたつた。

「それがなんだというのだ！何の力もない女ではないか。事故が起これば人は簡単にしぬものなのだ。

そつだ、事故はいつでも起こりうる。」

そつきたか、私を暗殺するつてー！

神王さまー、キコエマスカー！

「まあ、直接的な脅しですこと。

まあ、わたくしが今事故に遭つたとすれば、もっと事態は悪くなりますわよ。」

私は今まで張り付けていた、可愛らしい微笑みを一瞬で消しさつて、扇で顔を隠した。

「なにを・・・」

ぼっちゃんには、まだわかりませんかー！

「あらー。それもわかりませんかー。説明します？
では、簡単に。」

まず内政的には、王妃の座を狙つて各貴族の争いが激しくなります。もう諸外国で王女を送ろうという国はないでしょうからね。

下手すれば有力貴族の間で小競り合いがおきるでしょうねえ。

特に貴方の姉上様が嫁いだ先なんかは、自分の子を世継ぎに、とかで、暗殺まで企ててくるかも？

外交的にはまずアルシエスとの関係悪化は避けられません。

塩を禁輸にされるか、少なくとも値段は倍以上にされますわねえ。

その上、いまはほどほどにこちらの友好国である、東の大国コノレアともぎくしゃくしますわ。

わたくしのすぐ上の姉が嫁いでおりまして、いままで10年以上恵まれなかった世継ぎを姉がなしましたもの。

姉がわたくしの不幸に黙っている訳ありませんし。

そうそう、神国からも冷たい仕打ちをうけるでしょうねえ。

わたくし、神王さまの覚えめでたき典礼の姫ですから。

この呼び名も神王陛下直々に付けてくださったのですよ。

あ、そういえば、殿下はまだ、神王陛下にお目通りできていらっしやらないのでしたっけ？

わたくしに事故なんかあれば、一生無理でしょうね。

そのほかにも色々ありますが、おききになりますか？」

わたしは指を折りながら、一々この国の傷をえぐってみせた。

確かに武力はすごいが、所詮なりあがり、がこの国の対外的な評価だ。

金を積んで神国になんとか国家としての承認を受けたが、その加護を受けるまでは至っておらず、

出先機関でもある、杜も作られていない、中途半端な扱いを受けている。

金で名は少しは売るけど、実は売らないよ、っていう神国の態度が

あからさま過ぎて少し笑える。

ようやく今回の婚礼（相手がおきにいりの私だから）によって神王の御臨席があるかも。

そうすれば、杜も作られて、やっと普通の国家になれるかも。と国民が盛り上がっているところなのだ。

私にもしここで何かあったら、神王の御臨席どころか、国家承認も危うくなるかもなのだ。

また、この地に昔あったフェルナータ前王家が滅びてから120年余り、この北の大地は群雄割拠で戦続きで疲弊している。

ようやく訪れた統一国家による平和を簡単に崩せば、民が黙ってはいないだろう。

戦による汚れを神王の加護で消しさり、少しでも大地の恵みを取り戻さなくてはならないのだ。

そのためにも、私という存在がないと、神王の加護さえどうなるかわからないのだ。

さて、それでも私を小娘と侮るなら。実家に帰らせていただきますわ。

私は百面相をしながら私を威圧する、でかくてうつつうしい王子の視線を扇でハタキ落としながら、

ようやく運ばれてきたまたも脂っこい料理に手を付け続けた。

しかし、さっぱりしたサラダが食べたい。

私は心の中でもたれる胃をさすりながら笑顔で食事を続けた。

王子は、益々グラスを傾ける。

そのこう着状態のまま、楽しいお披露目の晩餐会は終わった。

手を引かれながら、入場の時よりは、ゆっくり目になったエスコートで退出できた。

まあ、酔っ払っているから、早足にならなかった、ってのがせいはいなんだろうけど。

控室で、投げ捨てるように手を離された。

それに対して、冷たい視線をやるだけで済ませた。

もう、コイツには、マナーのなにも期待するもんか。

ゆっくりと綺麗な礼をとり、

「お先に下からさせていただきます。お休みなさいませ」

というと、迎えに来た騎士の手をとり控えの間から出て行くことに成功した。

はあ、ようやく部屋で休める。

背後で扉が閉まった時、私がそう思ったとしてもだれも責められないと思う。

でも、まだこの長い夜は終わってくれなかったのだ。

1-111 (後書き)

サスペンス(笑)では、ザッチョのところのコピードレスメーカーが伊豆(！?)の断崖絶壁で「こないでっ」「ってやるところまでプロットという名の妄想が進んでました。

1 - 1 2 (前書き)

これから楽しい悪だくみの時間ですよー。

私はウチの国から連れてきた騎士の手慣れたエスコートを受け、控えの間から退出した。

王子の心のこもらないいい加減なエスコートから解放されて、ふんわりと心からの微笑みを浮かべて、我が国の近衛騎士を見上げ

た。

そして踵かかとを返すとそのまま部屋を出て行く。

今までのエスコートが嘘のように滑るよう足に羽根がついているようにかるやかに歩いて。

ああ、歩きにくかった。

どんな場合でも優雅でいられるようなレッスンは受けていても、やっぱり、歩くときにこちらを気遣ってくれる人とのほうが歩き

やすいのは当たり前だし。

廊下に出た途端大げさな位肩の力を抜いて見せる。

「疲れたわ。」

母国語に戻して、きらっきら笑顔で近衛騎士を見上げた。

「姫、まだこちらは廊下ですか？」

すこし困ったように、騎士が私をたしなめる。

「わかってるわ、だからアルシエス語にしたじゃない。
きつとこちらの方にはわからないわよ。」

そう言っていたはずらっぽく笑いかけた。

「そうですかね?」

「きつとそうよ。もうフェールナタ語を使うのに疲れたわ、だから
お願い。」

私は騎士に甘えるように見上げた。

「わかりました、姫。」

部屋までの廊下は公共の場所だけれど、お構いなしに、私は騎士との
の会話を始める。

先ほどまでの王子とのこわばった表情が嘘のように楽しそうにゆっ
くりと歩きながら会話を楽しむ。

「ねえ、エリオット。今日の晚餐はどうだった?

貴方にもきちんとか飯は出たのかしら?」

最初から最後まで脂っこい料理を思い出しながら、私は騎士を名前
で呼んで一層親しげに話しました。

「我が姫。わたくしにまでお心を砕いていただけるとは、なんとお
優しい。」

そう言っではぐらかすけれど、エリオットは、あまり脂っぽい料理
は得意でないはず。
いつも魚メインだし。

「で？口にはあったのかしら？
私にはすこし脂が強すぎて、量が多すぎたわ。お酒となら丁度いい
のでしょうね。」

思い出しながら、そういった。

たしか2〜30年前位の宮廷料理の流行が、今日のようなこってり、
もっさり系だった気がする。

味付けも、その頃のままだし、きつと2〜30年前にどこかの宮廷
で出されて、それが宮廷料理として定着したまま。

ということなのだろう。

こんな料理、もし神王さまがいらしたときにも出したら、神王さま、
そのまま帰っちゃうわ。

だって、神王さまの最近のお気に入りは「絶海の孤島風」ですもの。

あ、でも今日の料理に、絶海の孤島の神秘の調味液、ソイソーをか
けたら少しはさっぱりするかも。

パンスーとかだともっとおいしいかな？でも酸っぱいからどうだろ
う？

「そうですね、わたくし自身は肉より魚を好みますし、ソースが単
調ですこし飽きました。」

警備中ですから、酒で流しこめませんし。」
そう言ってエリオットはすこし表情を曇らせた。

料理の多彩さは、やっぱり実家のほうが断然あるし、王家ではその
うちでもかなりな種類の料理を宮廷料理に取り入れている。

神王様もウチの料理が気に入ってたなあ。

今度来る時はコナモン持ってこいとか言ってたわね。

「そうかー。お互い大変な思いをしたわね。
私も給仕に、『ソイソーを。』とか言いそうになったわよ。」

そう言っただけで微笑みかける。

「確かにソイソーのほしくなる味付けでしたね。
わたくし的には、メイタイのソースも捨てがたく。」

メイタイという赤い実からできる、酸っぱくも甘いソースも最近「絶海の孤島」から伝わってきた調味液だ。

お子様から老人まで、今のアルシエスのトレンドは、メイタイソースの料理である。

卵から野菜までなんでもイケると評判である。

「そうね、クスターソースでもいいと思わない？」
クスターソースとは色々な野菜くずと香辛料を煮込んだソースである。

その色が茶色いため、最初は敬遠されていたが、コナモンとの相性がいいため、人気が上がってる。
これも絶海の孤島からの輸入品だ。

「クスターは思いつきませんでした。さすが姫。」
そう言っただけで、エリオットはすこし、その味を想像してほほを緩ませた。

そういえば、エリオットは目玉焼きクスター派だっけ。

私はソイソー派なんだけど。

「そう言えば、姫？」

なにか思いついたように、エリオットが立ち止まる。

「なにかしら？」

エリオットが意味のない行動をすること自体珍しい。

なにかあつたんだろうか？

「すっかり言い忘れておりましたが、今日のお召し物、本当にお似合いです。

春の女神のようです。ですが・・・少し袖口が。」

メモ用紙を一杯取り出したからなあ。袖。すこしほつれたかなあ？

「ありがとう、エリオット。」

痛んだ袖口をエリオットが腰のサツシユを外して隠してくれた。

そこまで痛んでないのに。やさしいな。

だから私はエリオットが大好き。

「いえ、姫のためのわたくしですので。礼など。

お部屋の中までエスコートさせていただいても？」

そっか、もうお部屋かあ。

うまいなあ、エリオットこつちも色々な演技を忘れて楽しんでいたのに、ちゃんと打ち合わせ通りだわ。

「もちろん、少し話し相手になって頂戴。

このサツシユも返さなくてはいけませんし。」

そこで言葉を切って、扇をゆっくり広げてわざと小声にした。

「この王子様は、話題も少なくて、しゃべり足りないの。」

そうやって扇を閉じると、エスコートのために預けた手に力を込めた。

「では、お付き合いいたしましょう」

エリオットは、その手の上に自らの手を重ねて、私をリードする。

私たちは、そうして割り振られた部屋の中に消えていく。

もちろん、今までの会話は、周囲の者に聞かせるようにしているのだ。

エリオットと怪しい関係、なんてありえないからー。

私まだ15歳ですし。

その上、エリオットって呼び捨ててますけど。このある意味胡散臭いまで理想の騎士様は、わたしの小兄様ですし。

身分を隠してこの城に潜入中です。

エリオットってのは、小兄様と同じ年の従兄の名前でして。

近衛に配属されているのですが、ぱっと見よく似ているのです。

中身は、小兄様とは違って朗らか系の癒しの騎士様です。

あ、兄様が癒されないうって訳ではありませんよ。

小兄様は、頭脳系たくらみ系です。

これから私の部屋で、いちやいちやしているように見せかけた作戦会議ですわよ。

本当は、客用宮殿に長居してはいけない騎士が、私の部屋にいてもおかしくない状況を作らなくちゃいけないのだからもの。

子供騙しでも、少しお芝居をしなくちゃね。

私は部屋に帰ってもやすめないのかあ。

今頃あの酔っ払い王子は、寝台でぐっすりなのかしら。

せいぜい悪夢でもみてうなされるといいと思います。本当に。

1 - 1 2 (後書き)

「絶海の孤島」調味料メモ

ソイソー 〓 しょうゆ

バンズー 〓 ぽんず

メイタイ 〓 トマトケチャップ

クステーソース 〓 ウスターソース

絶海の孤島はなにやら神秘の香り。

実は・・・

という話はまた次で。

1 - 13 (前書き)

ええと、まだ一日目が続きます。

すいません、あと1〜2話でようやく姫も寝られそうです。

2個の悪だくみが同時進行です。

1 - 13

「エリオットここで少し待っててね。着替えてくるから」

私はそういうと、応接室にエリオットを残したまま、居室に一旦引いた。

「お急ぎにならなくても結構ですよ。調度品でも眺めてますから。」

「

そう言っておどけるエリオットに少しだけ笑いかえした。

パタン。

私の後ろでドアが閉まる。

私は詰めていた息を吐いた。

「お疲れですか？」

ドレスを外すために近づいてきた、アンナとエレンが心配そうにそういった。

「すこし。ね。」

そう言っている間にも二人の腕は休みなく動き、どんどん私からドレスを外して行く。

「あ、そのドレス管理はしっかりね。どうもこちらには、デザイン

泥棒がいるみたいなの。」
ドレスを脱がされながら、今日の晩餐会の惨状を思い出して身震いしながら言った。

「どづいづいことですか？」

私の様子が変なのに気がついたのか、エレンが声をかけてきた。

「ああ、今話すわね。その前にリリコを呼んでもらっても大丈夫かしら？」

コルセットからようやく解放されて、ほっとして、息を吸い込む。その吸い込んだ空気をため息にしまいながら、エレンに頼んだ。ここまではずしてしまえば、あとはアンナ一人でも外せるし。

「今呼んでまいりますわ。御前、失礼いたします。」

エレンはそう言って、外したドレスを衣装カートに丁寧に入れると、礼をとって出て行った。

「で、どうでした？王子様は。」

二人だけになったとたん、アンナが好奇心旺盛にきいてきた。

「どうもこうも。残念なマッチョなのよー。アンナああ・・・」

アンダードレス一つになった私はアンナに抱きついた。

不安だった、怖かった、完全アウェイでだれもが私を侮っていた。ついつっかり涙が出そうになってアンナの服に顔をうずめた。

「大変でしたね。でも大丈夫ですよ。みんなで姫さまを支えますからね。」

いざとなったら、『実家に帰らせていただきます』で行きましょう。

いざとなれば、神王陛下が恐れ多くももらってくださるそうですから。」

喉の奥でアンナが笑う。

「そういえば、嫁に行くと神王様に言ったとき、そんなこと言っ
て下さったわねえ。」

「冗談の好きな方ですからねえ」

「本当に」

二人でクスクスと笑うと、色々な緊張がほどけて行く。

「さて、サパーをきて下さいな、姫」

「コルセットなしでね」

「もちろん。」

コンコン。

ドアがノックされた。

「誰です？」アンナの声が厳しくなった。

「お呼びにより、リリコさんをお連れしました」

エレンの声がする。

「姫様。どうします？」

緩めに仕立てられたサパードレスを私に着つけながら、アンナが聞

いてくる。

「着替え終わったら、エリオットと一緒にいっぺんに説明するから、応接室で待つて。」

みんなに聞いてほしいことがそれぞれある。だつたらすべてをいっぺんに話してしまった方が、状況もわかりやすいだろう。

アンナが頷く。

そして、少し声を張って、外に聞こえるように言った。

「姫様の着替えが終わったら応接室でお会いになられます。少し待つように。あとお茶の支度を」

そう言つて、私に微笑みかける。

ディナーが脂っぽくて口の中がまだベタベタする気がする。お茶でいいからさっぱりしたい、そんな気分をわかってくれたようだ。

「はい。ではそのように」

ドアのそとで、エレンが返事をして、離れて行く気配がする。

「さあ、いつも通り可愛らしいですよ、姫様。」

私が着替えるといつもアンナがかけてくれるこの一言。この一言で私は顔をあげて歩いていける。

私、エリオット、アンナ、エレン、リリコ。

応接室で、私が晩餐会の間書き留めていたメモをティーセットの間一杯に広げている。

「これ、本当ですか？」

リリコが、怒りに震えながら私のメモを握り締める。

そのメモには晩餐会の出席者のドレスが、王家専属になったリリコのドレスそっくりに仕立てられていたことが書いてある。

「ええ、本当よ、きっとアイツがこの国に入り込んでいるとみて間違いないでしょうね。」

縫い目の特徴といい、厭味ったらしいほど安っぽく仕立ててくることと言い、絶対アレよ」

リリコは、アルシエスに来てから色々ひどい目に遭って、現在の地位に昇りつめたのだ。

そのひどい目のほとんどが、アレのせいである。

本当は名前も聞きたくもないだろう。せっかくリリコも立ち直ってきたところだけに、リリコの表情が暗くなっていく。

「あ、あたしがあのと騙されたりしたから、いつまでも王家の皆さまにはご迷惑を」

リリコがうなだれたまま、指をかむ。

リリコは相手を責めるより自分をどんどん責めてしまう性格なので、そうならないためにも今回きつちりカタをつけるべきだと思う。

「仕方ないわ、貴女はこちらに来たばかりで何も知らなかったんだから。」

それでも、結果的にはアレのおかげで、私は専属のデザイナーを手に入れることが出来たんだから、よかったと思ってるわ」

私ははげますように、リリコの手を握る。

絶海の孤島からの来訪者を拾ったモノは、国に報告することになっ

ている。

それをわざとしなかったうえ、リリコの不安を利用しつくしたアイツがこの国いる。

ならば、保護者である私が、今度こそ守ってやる。

「こちらに来てくれたのがリリコで本当によかった。だから、こんどこそ、アイツをどうにかして抹殺する必要があるのよ。

リリコのためにも今度こそ決着をつけなくてはね。」

そう決意を込めて言葉にすると、もやもやしたものがすっきりと落ち着いてきた。

リリコの目にも少し覇気もどる。

それを見て安心した私は、ずっと黙り込んだ小兄様を見る。

小兄様は私が広げたメモを見ながら、どんだん眉間にしわを寄せて行く。

「そうだね、やっちゃおうか。

武でも実力があることをこちらに示しておかないと、いつまでもなめられてる訳にはいかないしね。

結婚式に戴冠式だと？一言も相談なくよくもなめた真似してくれたよ」

兄様、その微笑み怖いです。

この国はまだ大国の自覚がない。

自覚を持たせるためにもここでしつけておかないと、近隣の迷惑になるバカ犬になってしまう。

「小・エリオット。やってしまいましたよね。」

ふう、こんな壁に何が入ってるかわからない城内で、エリオットの正体をばらしたら大変だね。

「決まりだな」

口を滑らしかけた私をちらりと睨むと、エリオットは、お茶を口に運んだ。

集まったメンツはその言葉に重々しく頷いた。

「さて、戴冠式だけど、アーシエ姫。どうするつもりだい？」
小兄様ってばそれを私にききますか？

まあ、この国のこんな状況じゃ、私に聞くしかありませんしね。

「そうね、まだこの国は様式が決まっていないうだし、私にやりやすいように少し手をいれるつもりだけど、基本的には古のフェルナータの様式を使って行けばいいと思っています。」

神王杜のほうでもフェルナータの王族傍系の末、ということタンジールで此方を国家承認したようだし。」

フェルナータとは長く友好関係を結んでいたので、アルシエス実家には歴代の戴冠式の絵巻まで残っている。

頭を下げてでも見たいのではないだろうか？

「ふん。よくやる手ではあるけどな。」

小兄様、口が悪すぎます。

「フェルナータの形式をついでやらないと、血統を証明するためにも諸外国に示しがつかないし。」

こちらは傍系を名乗るんだから、それはわかっているだろう。

「でも、こちらには、長引く戦乱のせいでろくに資料もない、と」
兄様、身も蓋もありません……。
もう少しソフトに言ってください。

「そうみたい、晚餐もあちこちの様式のつぎはぎで、みつともないことこの上なかったし。」
しっかし、あんな晚餐会やらかしといて、フェルナータ旧王家を標榜するとはねえ。

知らないって怖いわ。

フェルナータの晚餐会と言えば近隣に鳴り響く美食の宴だったのにあの油漬けだらけのご飯をだしといて、それをいうかー。知らないって怖いわ。

「10日で、しっけ治せるか？」

そう言ってからになったティーカップを小兄様は指で持て遊ぶ。

「無理ね。まあ、がんばればまねごと位にはできるかも。

でも、今のままじゃ言うこと聞いて下さらないでしょうね。」
そう言っただけ息をつく。

だって、次の王様があの朴念仁を具現化したようなザツチョだからね。

マナーの必要性を感じないでしょうねえ。

「まあ、まねごとができれば今回はそれでいいか。」

小兄様はそう言っただけ息をつく。

「私としては、本当に嫌なんだけど。仕方ないわよね。でも、ね。少し時間を稼ごうと思うの。」

そこまで私が言ったところで、小兄様の纏う空気が変わる、小兄様の拳が机をコツコツと2度かるくたたいた。

聞かれてる、という合図。

私はそのあと簡単に、晚餐の間に考え付いた時間稼ぎの方法を声に

出さずにメモにしてみんなに告げた。

その間私は書いていることとはまるで違う事を口にしていた。それは、聞かれてもいいこと、というよりぜひこちら様に聞いてほしいことだった。

「あの、デザイン盗人を絶対に捕まえてやりましょう」

そういうと、どのようにしてアイツを追い詰めていくかをちょっとドラマチックに語って見せた。

「……姫様……」

すべてを筆談で告げ終わったあと、アンナは呆れたように私を見つめた。

「アーシェ・姫・それはやりすぎじゃないのか？」
小兄様は天井を仰ぐ。

「それは、こちらの王子様が怒りませんか？」
リリコはそう言っただけで立ち上がった。

「このくらいやらないと、ザツチョが気がつかないと思う。」
私はそう言っただけでこり笑った。

「で、エリオット。この国は杜がないから、陣もないのよね？」
陣とは、陣同志ですぐさま手紙や小さな荷物ぐらいなら転送できる便利なモノで、神王様の管理下に置かれている輸送手段だ。それが置かれているのは国の中心部であることが多い。

一般人でもお金さえ払えば利用できるもので、一般の人は杜とは輸送屋くらいの認識であるが、それは杜の機能のほんの一部にすぎない。

社設置の目的は神王様の耳目の役目である、ってなってるしねえ。

「まずは、実家にお手紙書かないとね。何時つくかしら？
杜がないなんて、やっぱり成りあがり国家はこまるわ。」

あ、結婚したら私用の陣だけでも神王様にお願いしてつくってもらいましょう。」

晴れやかに笑った私の手は先ほどまで書いていた本当の悪だくみの計画をロウソクの炎の中に隠した。

「それがようございます、姫様。」

今まで控えていたアンナがそう言って不敵に笑った。

アンナが静かに怒ってて、怖い。

こうして、私達による、しつけのわるい大型犬タンジールのしつけ計画が静かにスタートしたのだった。

1 - 13 (後書き)

神王様についてはおいおい説明します。

絶海の孤島は文化も文明も違う場所です。

来ることはできて行くことは難しい。

そんな場所です。

登場人物が増えてきたので、

そろそろ人物紹介のページを作ったほうがいいですか？

サパードレス「夜に自室で着るゆったり目で装飾も少なめの普段着で簡単なドレス。」

1 - 1 4 (前書き)

あけましておめでとうございます。

更新が滞りがちで本当にすいません(土下座)

お気に入り登録ありがとうございます。

可愛げのない姫と知り合いに言われてしまいました。

あたしには可愛い姫なんですけどねえ・・・

まさにタイミング良くといいますが、きつと色々報告とか受けてたんだろうなあとこちらが思うようなドストレートな瞬間にわたしに割り当てられた客間のドアがノックされた。

誰がこんな時間に、と思うこともなく、十中八九あのロマンスグレース宰相だと思つた。

きつと壁のメアリーさんから報告を受けたあとで来たのだろう。

ノックが聞こえたと言っても、曲がりなりも大国の王宮で、他国の王族に割り当てられた部屋が廊下直結、なんて安っぽいことはございません。

玄関のような待合室と言いますか、エントランスポーチがあって、そこには侍女か騎士が控えているものでございます。

その侍女や騎士が簡単な用向きと来た人物をうかがってから、中の偉い人（つまりこの場合は私）に通してもよいものか聞いて、それからの面会になります。

普通は芳名帳のようなものが受付に当たる人物に渡されていて、そのノートにあらかじめ主の予定が書き込まれており、そこに記載のない者は改めて時間を予約してもらつ、というのが貴人の面会方法。

まあ、私の場合今日ここにいたばかりで、予定なども公式にきまつていた物しか記載されていないし、予定表ではもう寝てるべき時間ですしね。

まあ尋ねてくるには非常識な時間ですから、受付時間外ということでも門前払いされてもおかしくないそんな場面でございます。

こういう時の不意な来客というのは、えてして「悪い知らせ」か「面倒事」と決まっている訳で、正直今日は色々ありすぎて、簡単な作戦会議がすんだら寝たい。というかもう寝たい。これでもまだ15歳になったばかりの子供なのだ。眠い時は寝たい。そんな気持ちを押し殺してお茶の片づけをしていたアンナに声をかけた。

「アンナ、出てきてくれる？」

私は片付けようとしていたアンナの手を押さえて目の前の冷めてしまったお茶を口にふくんだ。
淹れなおしている暇はないし、どうせまたこれからたくさんしゃべらなくてはならないのだ。

苦く冷めたお茶で少しでも目を覚まさないとやってられない。

そして音も立てずに目の前のお茶会を片付けた。

小兄様がその様子を面白そうに見ている。

だったらすこしは手伝えよ、今はエリオットのくせにー。

お客に対応していたアンナが戻ってきた。

「姫様。この国の宰相閣下、メラン公爵閣下がお目通りを願っておられますが」

おいでなさったわ。

アンナの声にそう思って気を引きしめた。

「姫、それではわたくしは護衛の任に戻ります。おいしいお茶を麗しい姫とご一緒出来ましたこと、この上なく幸いでございました」
そう言っ私私の足もとに跪いた兄様じゃなかったエリオットが私の手を取り口づけをおとした。

に・・・兄様のくせに・・・っ・・・決まりすぎてておもわず見とれた。

ちっ。どうせ私は美形4兄姉に似ない平凡姫ですよっ。

みんな奇麗過ぎて昔は自分の兄弟だとおもえなかったもんな。

兄という名詞はかつこいい男を指す言葉だという意味だと思っていた時期があるのは、知られたくない。

ついでに姉という意味は綺麗だと思っていたこともある。

そんな現実逃避をしてしまうほど、小兄様は決まっていたのである。

「ええ、エリオット、貴方がいてくれるから安心して夢の世界に行けます」

兄様の眼を熱っぽく見返す。

そうそう、設定では私たちは主従にしてはなんかアヤシイ関係にしておかなくてはいけないんだもの。

ほほを赤くしてなかなか手を引かないで名残惜しそうにする。

ふふん。兄様がちょっとびっくりしてるー。やりかえしてやったわー。

「願わくば夢でも姫を守れますよう」

そう言っで一礼するとエリオットはエントランスへ下がって行った。

「姫様がお会いになるそうです。どうぞ」

扉が閉まりかける時に、エリオットが宰相閣下に話しかけているのが聞こえてきた。

私は居住まいを正した。

「ひ、姫様。わ、私も下がらせていただきたいのですが・・・」

この部屋に取り残される形になってしまった、リリコが緊張したようにひきつった声で言う。

「ごめんねリリコ。もう少しここにいて。一言も言わなくていいから、お願い」

そう言っつてリリコに頼み込む。

「ひ・・姫様・・無理」

あがり症で引つ込み思案なリリコは少し震えている。
心なしか顔色も悪い。

「無理でも居て。3コニでいいから。」

そう言っつて手を伸ばして、膝で握りしめられた手を優しくたたいた。

「3コニも・・・？ 無理ですよ。」

そう言っつた声はどんどん小さくなっていく。

「ごめんその代わり好きなドレス一着作らせてあげる、なんの注文もしないから好きなデザインでね」

とっつておきの切り札を出した。

リリコが緊張しているときはドレスの事を考えさせて気をそらすの
が一番。

「ほ、本当に？」

今まで青くなっていたリリコの顔色がみるみる色を取り戻す。

「ええ、だから3コニ頑張っつて」

そう言っつて手をポンと叩く。

「わかりましたあ」

その頭は半分以上ドレスの事で占められてしまっているようだった。

「姫様、おはいいりいただいても？」
エリオットがそうドアの前で告げた。

「ええ、どうぞ。」
私は外向きの仮面をつけてそういった。

深夜の第二ラウンド。
対ロマンズグレー宰相閣下が始まるうとしていた。
私は気合をいれて立ち上がると、姿勢を正して、宰相を迎え入れた。
顔をこわばらせて。

「王女殿下、夜分遅く申し訳ございません。」
そういう宰相にぞんざいに手を差し伸べる。
その手をとって宰相はくちをつける真似をする。
あくまで儀礼的な挨拶だ。

「ええ、本当に。もう床に就こうと思っていたところですよ。手短
にお願いできますか？」
その挨拶を受けながら話に入る。
とてもぶっきらぼうだ。

「はい、もちろん。出来ればお人払いと、もう一人私の部下の入室
を許可していただきたいのです」
そういつて、私の後ろに控えるリリコに目をやる。そのあとでいま
入ってきた扉にめをやった。
まだ扉は開かれたままになっている。

その先には薄い茶色の髪をした、小兄様より頭一つ小さい細身の男
が立っていた。
これが部下なのだろう。

「それは矛盾しておられませんか？
この者は、我が国随一のドレスメーカー。ウエディングの最終打ち合わせをしていたところですよ。
また式典にも明るいものですから、同席は譲れませんわ。
また、騎士を呼びもどしてもよろしいかしら？
男性2名部屋に招き入れて女子供だけで逢ったとわかれば、私の傷になりますわ。」

今までの不機嫌を倍増したように強い声色で宰相の非礼をなじる。
あたりまえだ、貴族の娘だって父、兄弟以外の男と部屋の中に二人きりなどにならない。
ましてや私は王女だ、そんなはしたない真似は出来るわけではない。

「配慮が足らず申し訳ありません。どうぞ騎士をお呼びください」
内密の話を他に聞かせるなどもつてのほかだ。
でも相手が未婚の王族である以上、ある程度の付き人は必要になる。
私はそれを指摘して、結局小兄様・アンナ・リリコという3人を同席させることに成功した。
ここは隣国^{かんぜんアウエイ}王宮内であるにも関わらず。

「エリオット！ 入ってきて頂戴」
私は少し大きな声を出した。

「はっ。」
扉の脇で控えていた小兄様^{エリオット}が入ってくる。

「アンナ、お茶の支度を」
もう一方の扉の脇に控えていたアンナにそう声をかける。

「かしこまりました」

アンナが完璧な所作でお辞儀をして支度に出かけて行った。

私はそのあと宰相閣下に振りかえると、手ぶりだけで椅子をすすめた。

「いえ、どうぞお構いなく、夜も更けておりますし。」

椅子にすわる私をまつて宰相閣下が腰を下ろす。

お茶をそう言つて断つた。

それにも私は不快感を示す。

「貴方が構わなくても私が構つのです。お茶も飲まずにしゃべれとおっしゃるの？」

長丁場になりそうなことを暗示する。

その言葉にびくつとなつて宰相閣下が居住まいを正した。

「とんと、気がつきませんで。たびたびの御無礼を」
そう言つて謝る。

まったくこの国はどんだけ女を下にしているんだろう。

先が思いやられるわホント。

そう思つてタメイキをついた。

やつてられないわ。

「いえ、それで、何をお聞きになりたいの？」
ため息交じりにそう言い放つた。

「まず、部下のご紹介を」

そう言つてまだ部屋の隅に立っている男を手で示した。

これでゴネても寝る時間が減るだけなのでさらっと流した。

「許します」

「わたくし、礼官を承っております、レオ・スヌードと申します。よろしく願います」

そう言つて深々と礼をとつた。

私は了承を顕すようにこくんとうなづいた。

「で、宰相閣下、何をお聞きになりたいの？」
そしてすぐに宰相に向き直つた。

「王女殿下、単刀直入に言わせていただければ、前王室の即位並びに結婚式の方法、ですな」

またこれはウラのないズバツとしたものいいだね。

裏を読むことが日常茶飯事だった私にとっては新鮮だけど、やっぱり裏があるんじゃないかと勘ぐつてしまうわ。

「素直でよろしくてよ」

わたしはそう言つて微笑んだ。

「で、教えていただけるので？」

また直球だわー。

教える、つていうけど、貴方がたはどこまでご存じで、何処から教えればいいのかしら？

初歩からなのか上級からでいいのかで大きく違いがあるんだけど。どうしよう？

聞くのもめんどくさいなあ。

でもここで手を抜いたら、恥をかくのはこの私、典礼の姫の名にかけてがんばりますわ。

「私が出席して、みつともない式は出来ません。この10日でなん

とか見られるまでは体裁を整えていただきます。

ええ、絶対にみつともないことなどさせませんわ。

私が主役ですのに！ 私のプライドのためにもきっちりやっていたきますわよ。

出来ない、無理とは言わせませんからね。小国と貴方がたが侮る我^{アル}国^{シェス}でさえやり遂げてきたのですから、

大国の誉れ高い、貴国^{タンジール}で出来ない訳ありませんわよね」

「はい。」

私がそういうと、苦々しく宰相閣下が相槌を打つ。

さつき王子様がアルシェスをバカにしていたことは、出席していた宰相にはわかりすぎるほどわかつただろう。

侮った相手にできて自分が出来なければ、二重の意味で屈辱を受ける。

ましてや先ほどの晩餐会には他国の大使が列席していたのだから、出来ないとは言えないだろう。

バカにされたって、タダでは起きないわよ、それが小国の生き方つものなのだし。

「ではまず。式の延期と改めて招待客の皆さまに結婚式と即位式を同日にやることを早馬で知らせてください」

これはすぐにでもやらねばならないことだ。

10日で式典の準備など無理である。

その理由を用意してやるから、早く延期をせねば。

「延期など！無理・・・」

そこまで言った、礼官を睨みつけた。

「無理は言わせないと行ったはずです。」

口答えするくらいなら私実家に帰らせていただきます。

もちろん塩も一粒残らずもって帰りますからね。」

私は礼官から目を離さずに脅しをかけた。

これはもう国際問題なのだ。礼を失したのはタンジール、これから少しでも挽回せねばならない。

「しかし延期の理由は。」

そう宰相が突っ込む。

「神王様をご臨席なさるかもしれない、とふれてください。

ただし、文章ではなく、口頭での伝達で。

文章の方には、私が長旅で病に罹ったと。

また国王陛下の具合が芳しくなく、急ぎよ戴冠も同時で行うことになった、と

そのためあと国王陛下のご容体をみるため15日ほどの加療が必要になると。

その間にすべて支度を済ませます。25日の余裕が出来たのですから、無理だの出来ないだの言わないでくださいましね。

で、この25日間のあいだ、私はこの部屋で寝込んで居ることにしてアシエンラーナください」

「えっ！寝込む・・・は、はい」

私は寝ていることにして宮殿を自由に歩き回る、と言っているのだ。

「その間に式次第を作り直し、なおかつ周知徹底。その上料理も見直します。」

そしてキビキビと指示を繰り出した。

「はっ」

「今回は料理人も連れて来てください。いや、それよりもまずは……
何処までの実力があるか見てみたいので、明日の朝ロムレの朝食を持ってくるように伝えてください」

「ロムレ……ですか？」

「ロムレは料理の基本。簡単なようで様々な技術を必要とします。これを作らせれば大抵の料理人の腕がわかりますわ。出来れば目の前で作っていただきたいのですが。ああ、そうそうエレンに作っているところをみてもらいましょう。」

エレン？居るかしら？」

居室の方に声をかける。

「お呼びでしょうか？姫様」

そこから音も立てずにエレンが現れた。

「エレンお願いがあるのです。明日の朝ここの料理長に朝ごはんのロムレを作っていたので、
こちらでの作り方を学んできてちょうだい。」
あくまでもこちらが学ぶという形をとって、タンジールの面目を保った。

「かしこまりました。姫様お時間はいつも通りでよろしいのですか？」

「そうね、今日は少し疲れたから寝坊して朝、露有時に朝食にした

いの

「かしこまりましたでは、紫明時5コ二位に厨房に参ります」

「宰相閣下、そのように手配を。よろしいですか？」

「紫明・・・ですか？」

驚いたように、固まる宰相閣下

あれ？なんかへんかしら？

もしかしてもつと早いのかしら？

武力を重んじる国だから、きっと夜明け前から鍛錬とかするのかしら？

「あら遅かったかしら？」

そう聞き返した。

「いえとんでもない。宴のあとは我が国では黄光位まで寝ていることが普通で」

黄光ですって？

夜明けごろの紫明、そのあとの露有、そして明光、そのあとが黄光である、黄光となれば

もう朝ではなく、昼食時のことである。

「時間も無いのに、そんなに寝られるとお思い？

甘いですわ。そんなお考えなら私今から実家に帰ります」

私は呆れたように言い放ったあと、立ちあがった。

その眼にはしっかりとバカにしたような光をともして見下した。

「ひ、姫。お待ちくださいっ」

宰相が呼びとめる。

「では、宰相閣下、それから礼官のレオ・スヌード、一緒に朝食を食べながら打ち合わせをいたしましょう。」

私だってつかれている。
こちらら長旅の後だっていうんだよ。
寝てからにしない？と持ちかけてみた。

「はい？」

きよんとする宰相と礼官。
なに？そんなかおすんの？

「あらこちらの国では食事会議パワーミールはしませんの？」

アルシエスでは、国王一家の朝食は、一種の政治会議だ。
あれが問題になっている、これがいま好調だ、これが行き詰っているがなにかアイディアはないか。

そんな話をしながらゆっくりと10コニほどの時間をかける。

その話をするために夜はアドバイスをもらえそうな相手の部屋に資料をもっていくことも珍しくない。

資料を読んでもらってからのほうが、話が通りやすいのだ。

「朝食からは、さすがに」

私は本当にびっくりした。

え？午前中にやらないでいつやるのよ。

朝ごはんから昼にかけてが、アイディア出しの時、昼過ぎからが実行でしょ？

この国、なんでこんなに働かないの？

「あらあら、のんきですのねえ」
つい口から出てしまった。

どういふシステムでこの国出来てるんだろっ。
明日聞いてみよう。

「ああ、早く神王陛下にご招待のお手紙をかなかなくては、それがす
んでから休みませんと。」

この国の社はどこですか？来る時見かけませんでしたか？
ないことを知っていたいながらそう聞いてみる。

国として立つたならば、社はあつて当然なのだ。
ないというのは、周辺国に見下されているも同然。

「・・・我が国には社はございません」

そう言つて悔しそうな顔をする宰相閣下。

ここで、ぜひおとりなしを。なんて言つたならば少しは可愛げがある
のに、

あれ？もしかして私が個人的に神王陛下とお付き合いがあるのを知
らない、とかないよね？

「なんですって！ 社がなくては神王陛下に手紙も送れないではな
いですか。」

どうしよう、エレン。」

私は後ろに控えるエレンに相談した。

確か実家アルシエスに個人用社はおいてきちゃったよね？

「姫様ご安心ください。個人用社を国元より一緒に持ってまいりま
したわ」

そういつて胸を張るエレン。
さすがだわ。

「まあ、持ってこれたの。お兄様達お困りではないのかしら？
それでもこれで安心ね。」

早速お手紙を、招待状かしら？書かなくてはね」
おもいっきりの笑顔でエレンをほめた。

ちらりと横目でみると、宰相閣下は目が点になって私たちをみている。

もしかして、本当にしらなかったの？

うわー、どんだけ情報不足なの？

「かしこまりました、お部屋に御支度をしてまいります」
エレンはそう言って先ほど出てきた居室に戻って行った。

そのエレンの声とともに私は背後に立つエリオットに合図して椅子から立ち上がろうとした。

その合図にエリオットは私の手をとる。

それにあわせてリリコもぎこちなく立ち上がった。

つまり今日の話はこれまで、ということだ。

「姫お待ちください。打ち合わせがまだ何も」

宰相閣下が慌てて書類を示す。

なにいつてやがるのかしらー！。

「何をいつてるのかしら？

まず現行の式次第をおいていきなさい。それをたたき台にして式次第を組みます。」

その書類だけおいていつてくださいいな。

話は明日の朝です。

今までこのワタクシになにも知らせてこなかったくせに、
今日今すぐアドバイスをもらえらとでもおもっていらっしやるのか
しら？ ずいぶん身勝手ですこと。

一晩くらいやきもきなさい。

今日のワタクシが晩餐会会場でどれだけパニックになったか思い知
るといいと思いますわ」

私はそれだけ言うとエリオットの手をささえにしたように立ち上
がる。

「申し訳ありませんでした」
宰相が何度も頭を下げる。

「ではお茶でもいかが？」

立ったままでそれを言うのは、

一昨日来やがれ、って言ってるようなものなんだけど、それぐら
いはわかるよね？

「いえ、それには及びません、下がらせていただきます。」

そう言つて手に持った書類をそろえて私に差し出した。

慌てたように礼官もその書類を宰相様の手に持たせる。

「そう？残念ね？では明日露有時にお会いしましょう」

私はそれを受け取ると、エリオットと居室に下がった。
後ろにリリコを従えて。

「楽しみにしております、姫」

その背中に声をかけられた。

「ではまた」

振り返りもしないで私はそう言って、扉を閉めさせた。

後には、呆然とした宰相と礼官が残されたのだった。

そしてその身体の間を縫って、エレンとアンナが部屋の片づけを始めていた。

あらかた片付いたその部屋からアンナが宰相の背中を押しして連れ出すまで、二人とも動けなかったらしい。

まったく、武で鳴らす国タンジールのくせに情けないわね。

1 - 14 (後書き)

ロムレ〓オムレッツ

時間の推移のこと

紫明【しめい】〓午前4時から6時前まで(庶民・農民の朝)

露有【ろうう】〓午前6時から8時(仕事開始・商人の朝)

明光【めいこう】〓8時から10時(貴族・怠惰な人の朝)

黄光【きこう】〓10時から12時(お昼時)

一日目が終わったら

人物と特別な言葉一覧表のページを作ります。

少しお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0441u/>

或る政略結婚の実体

2012年1月6日18時48分発行